

異説SF超次元伝説ラル

目次

序 3

第一部 ラルの伝説 7

ラモー・ルーの復活

キャロン

サラ

伝説の剣

ゴモロスの神殿

ラモー・ルーの城

記憶

第二部

ラモー・ルーの夜

63

ラモー・ルーの夜

第一夜

ラモー・ルーの夜

第二夜

不思議な鏡

ラモー・ルーの夜

第三夜

ラモー・ルーの夜

第四夜

マリオ

ラモー・ルーの夜

第五夜

みそぎ 禊

ちぎ 契り

ユリア王女の帰還

第三部 二人の女王

177

異変

霧

お伽噺 とぎばなし

サラの過去 I

サラの過去 II

サラの過去 III

サラの過去 IV

微行

鏡の中へ

主あるじのいない城

シヤドル

ラルの真話 しんわ

静かなる時、リバーズの女王とゴモロスの王の子らによりよみがえる

序

ラルは四つの衛星を持つ青く輝く美しい星である。緑豊かな大陸を持ち、そこに住む人々は平和で穏やかな生活を送っていた。また、ラルには太古より言い伝えがあった。この宇宙を創造した女神が力の一部をこの星に残した、と。

——突然、この平和な星に恐怖が降り立つ。

ラルに隠された女神の力を手に入れようと、邪悪な魔王、ラモー・ルーが侵略してきたのだ。ラモー・ルーはその強大な魔力で大陸を引き裂くと、その半分をけっして太陽の昇らぬ地へと変え、自らの領地とした。

ラルの王とその后を始め、多くの犠牲を払った激しい戦いの末、ラルの七衛士は王家に伝わる七振りのリバースの剣と聖なるブレイブによって魔王を封印する事に成功した。

ラモー・ルーを退しりぞけた後も、魔王の領地とされた地は元には戻らず、永遠に夜の闇に包まれたそこは夜シヤドルの地と呼ばれ、その対比としてラルの人々の住む土地は昼ミユウの地と呼ばれるようになった。

ラモー・ルーとの戦いから十二年後――。
ラル王家を護衛する衛士達の一団が昼の地ミユウと夜の地シヤドルの境界に位置する神殿で野営をして
いた。

「なんでこんな辺境まで出張らねばならんのだ？」

「俺達見習いの訓練も兼ねてるんだ、文句言うなマリオ」

「こんな何もない退屈な廢墟よりも俺は田舎村でもいいから女がいる所がよかったぜ、
あー、つまらないねえ、まったたく……」

マリオと呼ばれた青年が垂れ流す愚痴に苛立った仲間の衛士が小石を投げつける。

「愚痴くうるせえ！ あっちいってろ！」

「つとと、解ったよ。その辺りを偵察してくるであります！ ……へへっ。」

小石を戯おどけるように軽く躲かわし、大袈裟に敬礼すると、マリオは神殿の中の方へと歩いて
行く。

治まらない怒りをぶつけるように、今度は近くにあった大きな石の塊に小石を投げつけ
る仲間の衛士。

「ふん、いちいち勘に触る奴め！」

衛士の八つ当たりで傷付けられた石の塊にはすでに無数の傷が……否、そこには文字が

刻まれていた。

「ゴモロス神殿は昼と夜が会おう場所」

今となっては読める者がいなくなった古代ラル語だった。

碑文はさらに続く。

「静かなる時、リバーズの女王とゴモロスの王の子らによりよみがえる」

しかし、こちらの文字は摩滅が激しく紋様として残っているだけで読み取れることは出来なかった。

ゴモロス神殿――、十二年前のラモー・ルーの侵略による混乱で放棄され、今は廃墟となり、かつての威容は見る影もなくなっていた。

「……、いやあ、神殿とは言え不気味だねえ、どうも……」

マリオは「あわよくば金目の物でも落ちてないか」と、キョロキョロしながら、奥へ奥へと入っていき、やがて広々とした大聖堂に出た。

「ヒュー、こりゃ立派なもんだ……おっ？」

大聖堂を見回していると、光を反射しキラキラと輝く物を見つけ、駆けよるマリオ。

「おほっ、水晶鏡か。しめしめ、これは金になるぞ……ヒエッ！」

マリオが水晶鏡の品定めをしていると、鏡に映っている自分とは別に人影のような黒い塊がいる事に気付き、恐怖に飛び退いた。しかし、好奇心からまた鏡に近づくと恐る恐る覗き込んだ。

「……なんだなんだあ？」

鏡の中の黒い塊はおいで／＼をしながらもう片方の手で宝石を差し出してくる。

「おほっ！ 俺にくれるのかあ？」

宝石に向かって出されたマリオの手は水晶鏡の中にズブリと入っていく。そして、マリオが宝石を掴んだ瞬間、黒い塊の眼が妖しく光ると宝石から黒い紋様が流れ出し、マリオの腕に流れ込んでいく。

「うわあああっ！」

第一部

ラルの伝説

ラモー・ルーの復活

ラモー・ルーとの戦いから十四年が経っていた。ラルの人々はラル王家唯一の生き残りであるユリア王女を中心に復興をとげていた。

昼の地に再建されたラル城。その城下町、客で賑わう酒場で狩人達が噂話をしていた。

「よう兄弟、最近、森で魔物を多く見るようになったと思わないか？」

「おうよ、おまえもそう思うか。前は月にいっぺん出くわすかどうかだったのが、ここんどこ、ほとんど毎日だぜ」

「奴らを狩っても売りモンになりやしねえから、弱ったもんだぜ」

彼等の言う森とは夜の地シヤドルにあるデイメルンの森を指し、人の立ち入る事のないそこは獲物である動物が多く棲み、とりわけ命知らずの狩人は格好の猟場としていた。

狩人達の話聞いていた老人が口をはさんできた。

「おい、あんた達、魔物が増えたって言ったおったな？ ……もしや、ラモー・ルーが

よみがえ
蘇よみがえったんじゃないのか？」

「わはは！ まさかそんなことはあるめえ。ラモーのヤロウはあの七大衛士ななだいえいし様達が倒し

てくださったと、ガキの頃散々言い聞かされたぜ？　じいさんの方こそ、それを良く知ってるんじゃないのか？」

「そうだ、そうだ！　わはははは！」

「仮に復活しても、そこにおられる衛士部隊長殿が簡単に倒してくれるさ、なあマリオ？」

マリオと呼ばれた男が苦笑いしながらジョッキを軽く掲げる。

「さあ、じいさん、辛気くさいこと言っていないで楽しく飲もうぜ！　ヒック」

顔を真っ赤にした若者が老人の背中をバンバンと叩きながら酒を勧める。

今日も城下町の平和な夜が更けていく……

深夜、ラル城の裏門に黒い甲冑を着た数人の者達が張り付いている。固く閉ざされた扉をトン、トン、トントン…と符丁のように叩くと、内側からかんぬき門を外す音が聞こえた。続いて一人が通れるだけ扉が開かれると、素早く城内へ入っていく黒い甲冑達。

王女の寝所のドアが静かに開かれ、数人の侵入者がユリア王女の眠るベッドへと忍び寄っていく。

侵入者の気配にユリア王女が目覚めます。

「……な、何者……うっ！ ……」

叫ぼうとするユリアの口を侵入者の手が素早く塞ぐ。

「離しなさい、無礼者！」

が、ユリアはその手をすぐに振り解くと、逃れようと扉の方へ行こうとするが、侵入者に阻まれ、部屋の隅へと追いやられてしまう。

黒とは違う色の甲冑の者がユリアの前に立つ。

「ユリア様、お静かに……」

そう言つて、人差し指を口をあて、シート、というポーズを取った男はラルの衛士の甲冑を着ていた。

「お、……おまえはマリオ！」

マリオはユリア王女の鼻にハンカチを当てる。それには眠り薬が仕込まれていたのか、カクンと気を失うユリア王女。

「ははは、自分で言うのも何だが、ここは警備がザル過ぎるね、まったく」

ユリア王女を掠さらっていく黒い甲冑達を見送るマリオ。

ラモー・ルーの城……、それは夜の地シヤドルの奥深く、荒涼とした岩石砂漠の中心にあった。

ラモー・ルーの居城であり、ラモー軍団の拠点、そして星々を巡る宇宙船でもあった。

石牢に鞭の音が木霊する度、鎖で大の字に磔にされ、裸に剥かれた少女の肌に痛々しい朱の傷痕が付けられていく。

「どうだ？ そろそろ言いたくなかったのではないか？」

ドロスはユリア王女の顎に鞭の柄を添えると無理矢理顔を上げさせる。

「……知りません」

そう答えた瞬間、ドロスは鞭を持った腕を振る。

「アウツッ！」

空気を切り裂く音と共にまた一つ王女の体に鞭の痕が刻まれる。

「言え！ 女神の力の在処を。ラルの王女であるお前が知らぬはずあるまい！」

ドロスは剥き出しにされているユリア王女のクレバスにグリグリと鞭の柄をねじり込む。

「アゲウウツッ！」

苦痛に顔を歪めるユリア王女。

「言わぬとこの鞭がお前の初めての相手になるぞ……」

「……知らないものは、答えられません」

ユリア王女は涙を流しながらも気丈に答える。

「ならば仕方あるまい……」

鞭の柄つかに力を込めるドロス。

「何をしておるのだドロス！ 止めやめよ！」

石牢に怒号が響き、黒い大きな塊が入ってくる。

「おまえは女の扱いが分かっておらん。下がっておれ、ドロス」

「ははっ……」

すぐごとと退出するドロス。

「初めまして、ユリア王女。わしの名はラモー・ルー」

「ラ……ラモー・ルー……？」

その名を聞き、信じられないという表情でラモー・ルーを見つめるユリア王女。

「この玉のように美しい肌を傷つけるなど、言語道断。そうでしょう？ ユリア王女」

ラモー・ルーの指が王女の肌をいやらしく撫でる。その指の感触に鳥肌が立つユリア王女。

「……おまえは十四年前に倒されたはず……どうして……」

「いえいえ、倒されてはいません。魔力を奪われ、封印をされていただけです。その縛しましめを解くのに十二年、失われた魔力を取り戻す為にさらに二年もかかってしまいました。そして今、あなたの前に立っているのです、フッフ」

「そ、そんな……、」

「ユリア王女の傷の手当てをして差し上げろ。」

ラモー・ルーの指がユリア王女のクレバスに滑り込み愛撫する。

「くっ……うう」

屈辱に唇を噛むユリア王女。

「……そしてその後は、生贄あとの間まにお連れするのだ、フッフッフ」

ユリア王女は「生贄いけにえ」という言葉がもたらす恐怖に震える。

「いやっ、いやあああああっ！」

後に控えていた黒いローブを着た二人がユリア王女の鎖を解き、石牢から連れ出している。

キヤロン

昼の地の抜けるような青空を舞う翼竜。

その背にはポニーテールに纏めた長い金髪を風になびかる少女が乗っていた。服は潤み朱色に染められた麻の貫頭衣、背中には収穫物で一杯の籠を背負っていた。

彼女は一目でどこかの村娘と分かる格好だったが、よく見ると手綱を握る左腕には黄金色の腕輪、古びてはいるが拵えがしっかりした短剣を腰に下げていて、村娘にしては不釣り合いなものを身に付けていた。

キヤロンは山菜や薬草などで一杯になった背中の籠をポンポンと叩き、満面の笑みを浮かべていた。

「今日は珍しい薬草を見つけたから結構な高値で売れるはずだわ、ウヒヒツ」
おっと、という顔で口を押さえるキヤロン。祖父に「女の子が下品な笑い方をするものじゃない」といつも注意されていたのを思い出したのだ。

「キーラ、この風に乗るわよ、それっ！」

上昇気流を掴むため、翼竜^{キョウラ}を旋回させたキャロンの視界一杯にディメルンの森が広がった。

十四年前、魔王ラモー・ルーが大地を引き裂いて出来た大溪谷を堺に、ラルの星は昼^{ミユツ}の地と夜^{シヤドル}の地に分かれてしまった。ディメルンの森は夜^{シヤドル}の地に横たわる広大な森であり、魔物達が彷徨^{うろつ}く危険な場所であった。

「大丈夫かなライケさん……」

キャロンは一ヶ月前に会った青年の事を思い出し、心配そうに漆黒の森を見つめた。

一ヶ月前――。

ライケと名乗る青年がキャロンの祖父、ルークを訪ねてきた。

「……なんじゃと、ユリア王女が掠^{さら}われた？」

「そうです。……城の嚴重な警備が破られて」

「で、どこのどいつじゃ、そんな無礼な事をするやつは！」

「大溪谷を越え、ディメルンの森……、ラモー・ルー城の方向へと飛び去っていく黒騎兵のフライングマシンを目撃したものがいます」

「黒騎兵じゃと……？ まさか、ラモー・ルーが！ ……いやそんな事はありません。わし

らがあいつを倒したんじゃ」

「最近、黒騎兵に襲われた者がいます。ディメルンの森では魔物が増えているとの情報も。……そのまさかもありえます」

「むう……信じられん」

重苦しい空気が流れる。

「ルークさん、かつて魔王を倒した七大衛士ななだいえいしの一人として、ユリア王女救出に御助力を頂けませんか？」

「わしはもう歳じゃ……それに今のわしには守るべきキャランがいる」
 そう言うルークは横に立っているキャランを優しい目で見つめていた。

ライケは老人の少女に対する慈しいづくみを目の当たりにし、仕方ないという風に小さく頭を左右に振った。

「……残念です。では私はこれで失礼します。急いで救出隊に合流せねばなりませんので」

「ライケよ、ちょっと待っておれ」

「……?」

ルークは家の奥に引っ込み、しばらくすると戦斧を持って出てくる。

「わしは行けん……じゃが、これを持っていけ」

ルークはライケにその戦斧を渡す。それはかなり年期の入った物ではあったが、刃の冷たい煌めきが、未だ抜群の切れ味を持っていることを物語っていた。

「……これは？」

「わしも、亡くなったおまえの父もよく知っている友の物じゃ。残念な事にいつも最近亡くなったの。わしが形見として預かっておった。おまえの心強い味方になってくれるだろう」

ライケは戦斧を軽く振って、使い心地を確かめる。

「ありがとうございます。ルークさん。」

風に流されたか、ふと気付くとキャロンは大峡谷の上を飛んでいた。それは魔物の支配する土地、夜の地に近づいている事を意味する。

「キーラ、なにやってんのよ！ こっちは危ないんだから、早く昼の地へ戻るのよ！」
 昼の地の方向へと翼竜の手綱を引くキャロン。彼女の視界の端に黒い点が三つ入ってくる。

「……？」

その方向に目を凝らすと、三つの黒い点はグングンと大きくなっていき、あっという間に目の前に迫ってくる。

「危ない！」

寸での所で避けたキャロンの横を黒い物体が掠めて飛んで行く。

振り返って見ると、飛行機械に乗った黒い鎧の兵士。

(あれが、おじいちゃんが言ってた黒騎兵……ラモー・ルーの兵隊……)

背中に嫌な汗が噴き出してくるのを感じるキャロン。

急旋回した黒騎兵が剣を振りかざし、再び襲ってくるのが見えた。

「いけない！ キーラ、逃げるわよ！」

ここで竦んでる場合じゃないと、キャロン達は慌てて逃げ始めた。

「きゃああっ！」

黒騎兵の剣をかわし、ジグザグと逃げ回りながらキャロンは翼竜に鞭を入れる。翼竜も斬られてはたまらないと全速力で飛行する。

追いかけてくる黒騎兵達を徐々に振り切っていく翼竜。

「ちょっと、どこ行ってんのよお！」

しかし、昼の地へと逃げたいのに翼竜は大峡谷に沿って飛んでいた。

やがて、キャロンの行く手に大きな建物が姿を現す。

「あれは……ゴモロスの神殿……」

丁度、キャロンがゴモロスの神殿の上空にさしかかった時、黒騎兵の剣が擦かすっていたのか手綱たづながブツツという音と共に切れた。

「……えっ？」

キャロンは空中に舞い、そしてゴモロス神殿へと真つ逆さまに落ちていく。

「キャアアアアッ！」

その時……、

カッ！

ゴモロス神殿を**目映まばゆ**い光が包んだ。

強力な光の目潰しを喰らった黒騎兵達は動きを止める。

光に背を向けて飛んでいた為、目が眩まなかった翼竜キークラは黒騎兵達が怯んでいる隙に、**昼ヒルの地チへと全速で飛び去っていった。**

サラ

「ラモー・ルー城のとある部屋――、

その部屋には厚みのある黒い絨毯じゅうたんが敷かれ、その上に一糸纏まとわぬ姿の少女が座っていた。……いや、黒い絨毯じゅうたんに見えたものはドロドロと蠢くゲル状の魔物だった。魔物の上に馬乗りになった少女の秘裂には魔物の触手が差し込まれ、トロトロと溢れ出す愛液をしやぶられていた。

「ああっ……はあああん……アア……」

「お前の蜜は本当に美味だ……わしの体の中に魔力が満ち溢れてくる……」

ゲル状の魔物は体の形を变幻自在に変え、少女の体に絡みつき翳かっていた。やがて魔物の体の一部がペニスを形作り、固く強張ると少女の花卉はなびらを貫く。

「んっ……あああああっ！」

テーブルの上に置かれた燭台あかの灯りが少女と魔物の交わりを壁に投影し、淫みだらな影絵を作り出していた。

部屋の隅には大きな鏡が置かれてあり、その前には古びたローブを着た者が座っていた。

目深に被ったフードからは髑髏むくろの顔が半分覗のぞき、ピクリとも動かない様子からそれは骸むくろのように見えた。

魔物がドロドロと小山のように盛り上がると、それは人の上半身の形となっていき、そこにラモー・ルーが姿を現した。過去の戦いで潰つぶされたのだろうか、失っている左目をカリカリと指で擦こすっていた。

「鏡使のぞいよ、ゴロモスの神殿を覗のぞいてみよ……左目が疼うずく」

ラモー・ルーに「鏡使のぞい」と呼ばれた古びたローブは、カラカラと乾いた音を立てながら動き出し、鏡の前に手を翳かざすと呪文を呟つぶいた。すると、映っていた黒い塊と少女のまぶ、わいはが揺らめくように消えていき、ここではない、どこか別の場所が映し出されていた。その鏡は魔力であらゆる場所を見る事が出来る、物見の鏡ものみだった。

鏡の表面を撫でるように掌てのひらを動かす度、映されている場所も切り替わっていく。それを何度かくりかえしてくうち、鏡使のぞいの手が止まる。

「ラモー様……」

「なんだ……」

「大聖堂に何者かがおります……」

「やはり、また宝物漁ぼうぶつあさりの狩人が迷い込んでいたか。すぐに黒騎兵に始末させておけ」

「……いえ、これをご覧下さい」
鏡使いが物見の鏡をラモー・ルーに示す。

「祭壇の上か……」

鏡が映す祭壇の上には少女が横たわっていた。

長い金髪をポニーテールに纏めた少女は半裸とも言える奇妙な衣装を着ていた。

「ほう……美味そうな娘ではないか」

ラモー・ルーの顔が好色に歪む。

「この者の見慣れぬ格好……もしや伝説の剣士では？」

物見の鏡を操作し、少女を大写しにする鏡使い。

「フッフ、こんな小娘がゴモロスの神官どもが語っていた伝説の剣士だと？ ……おまえはどう思う、サラ？」

十四年前、ラモー・ルーはゴモロス神殿を襲った。それは宇宙創造の女神が、この星ラールに隠したという力の手がかりを得る為だった。

その時、神官の一人が今わの際に放った言葉がラモー・ルーの脳裏に蘇っていた。
「四つの月が並ぶとき

伝説の剣士がゴモロスの神殿に降り立ち

悪を討つだろう、

ウゾウゾと蠢くラモー・ルーの絨毯の上で「サラ」と呼ばれた少女は体を起こすと、四つん這いで物見の鏡の前まで行き、立ち上がった。目の前でフルフルと揺れる少女の二つの乳房を鏡使いが食い入るように見ていた。

鏡使いの視線を気にもせず、サラは頬にかかった栗色の髪を指でかき上げながら鏡を覗き込む。

「ここをよく見せて」

サラが鏡の中の少女の左手にある腕輪を指差すが、鏡使いは彼女の形の良い乳房に見とれたまま動かない。

「……ここ！」

少し強い調子の声にハッとした鏡使いは、慌てて鏡の操作をする。

拡大して映された腕輪には複雑な模様が刻まれていた。……が、サラの眼が紋様を流れるように追う。それは彼女が文字として認識している事を物語っていた。

「……ここに我が力の鍵を収める」と刻まれています」

「ふむ、古代ラル語でか？」

サラは頷うなずき、続ける。

「……この腕輪、伝え聞いているラル王家伝来の物のように思います」
今度は肩にかかった髪を手でかき上げるサラ。彼女の右腕の銀色の腕輪が燭台の光を反射し、キラリと輝く。それは鏡に映った少女がしている腕輪によく似ていた。

「ううむ、何故ユリア王女ではなくこの小娘がラル王家の腕輪を……」

そう言うサラモーター・ルーは触手を伸ばしサラを^{から}掬め捕ると自分へ向かって放り投げた。

「きゃあっ！」

ラモーター・ルーのゲル状の体がサラを受け止める。

「これは……しばらく得られなかった女神の力への手がかりとなるか、フッフ」

ひとり^{ひと}言^{ごと}ちながらラモーター・ルーはうつ伏せになったサラの尻を両手で撫で回す。

サラが腰を突き出すように上げるとラモーター・ルーは指で彼女のクレバスを押し広げ、ペニスを挿入する。

「はうっ、ああんっ……」

ラモーター・ルーの自在に変形する体はサラをうつ伏せでM字開脚の体勢に押さえつけ、捧げられた肉壺に容赦なくペニスを叩きつける。

「はっあああっ、ああああっ！」

「鏡使いよ、黒騎兵をゴモロスの神殿に向かわせるのだ」

ピストン運動するラモー・ルーのペニスにサラの愛液が絡みキラキラと光を反射していた。

「すでに付近を哨戒している黒騎兵が向かっております」

「ああっ！ あああん！ はああああんっ！」

鏡使いのボソボソとした言葉をサラの嬌声がかき消していた。

伝説の剣

ゴモロス神殿……、昼ヒユの地と夜シヤドの地を分かつ大峽谷にそれはあつた。

十四年前、ラモー・ルーは侵略の手始めにラル王国首都を中心に大陸を真つ二つに引き裂き、街を粉々に破壊した。

大地に巨大な裂け目が出来るほどの厄災にあつても不思議な事にゴモロスの神殿だけは破壊まぬがを免れ、今も大峽谷を跨またぐように建つていた。しかし、魔物の棲むディメルンの森に近い事もあつて、放棄され廢墟と化していた。

四つ並んだラルの月が天頂にさしかかろうとした頃。ゴモロス神殿の大聖堂の天窓が月光を招き入れ、その中央に据えられた祭壇を神々しく照らし出していった。

石造りの祭壇の上に少女が横たわっていた

「う……んん……」

淡い月の光に頬を撫でられキャロンが目を覚ます。

「んん、……なんなの、ここ？ 私どうして……」

キャロンは黒騎兵から逃げ回っているうちに翼竜キープラから振り落とされた所までしか記憶が辿れない。胡床あぐらをかき腕組みをして、うーん…と思ひ出そうとがんばるキャロンだったが、自分の格好に気付き、呆然とする。

「……やだ！ なにこれ？」

大事な母の形見の腕輪と祖父から贈られた短剣は残っていたものの、さっきまで着ていた服は消え去り、代わりに甲冑——左肩には肩当て、両足には膝当てに脛当てと鉄靴——が身に付けられていたが、一番守らなければならぬ体には胸と腰を薄い布が覆っているだけ、というなんともアンバランスな姿になっていた。

「いやあん、いったいなんなのこれえ……」

裸に近い格好に頬を赤らめるキャロン。

「あうう、すごく恥ずかしいけど……、今は服よりもここはどこなのか知るのが先ね」
 気持ち切り替え、キャロンはきよきよと辺りを見回したものの、天窓は祭壇を照らしているだけで、周りは薄暗く、自分がいる場所がどうなっているかよく解らなかった。
 キャロンが祭壇から降りようとしたその時、視界の端を素早い動きの何かかすがさっと掠めた。

「やだ！ 今度はなに？」

キャロンはあわてて祭壇から降りるとその影に隠れた。

暗くて良くは見えないが、大きな柱と柱の間をスッ、スッと何か移動しているようだった。

キャロンは何か動いていく方向とは逆方向に逃げようと祭壇をぐるりと回り込もうと後を向いたその瞬間、何かと鉢合わせする。

「きゃあああああっ！」

「うわあああああ！」

二つの悲鳴が大聖堂に響く。

「……で、あなたは逃げ遅れてラモー・ルーにその姿にされてしまった、と？」

祭壇に腰掛けたキャロンの周りを子犬くらいの大きさで翼竜キョウラを寸詰まりにしたような姿の黒い魔物がパタパタと飛んでいた。

「そうだよ」

魔物の名はペルルと言い、元は人間で、ここゴモロス神殿で神官見習いとして働いていた。神殿がラモー・ルーの軍団に襲撃を受けた際に逃げ遅れ、座興ざきように魔力で今の姿に変えられてしまったという。

くるくると旋回していたペルルはキャロンの正面で止まると、その紅い眼で頭から足の先までまじまじと見つめる。

「……あっ！」

キャロンは今自分が裸同然の姿であることを思い出し、あわてて両手で体を隠す。

「なっ、なによお、いやらしい！」

キャロンの抗議を無視し、ペルルは静かに語る。

「四つの月が並ぶとき、伝説の剣士がゴモロスの神殿に降り立ち、悪を討つだろう」

「……？ 何のこと？」

「古くから言い伝えられている予言さ。あれを見てごらん」

天窓の向こうに見える夜空を指差すペルル。そこには四つのラルの月が整列していた。

「ラルの四つの月が並んでいる……。そして、ここに君がゴモロスの神殿に現れた……」

「……？ ……？」

キャロンはいまいち理解出来ないでいる。

「今、予言が本当になろうとしている。君は伝説の剣士なんだ」

ペルルは指差した方向をゆっくりと月からキャロンへと変える。

「……ええっ？ ……私が？ ……伝説の剣士い？」

「伝説の剣士である君は悪を討たねばならない……そうラモー・ルーを倒すんだ」

「私があ？ あはははは！ 冗談はよしてよ、もう！ あはははは！」

コロコロしたキャロンの笑い声が大聖堂に響く。

「じゃあ、これを見ても冗談だと笑うかい？」

「？」

ペルルは祭壇の奥にある水晶鏡の前に立つとなにやら呪文を唱える。すると、鏡にぼんやりと映像が浮かび上がってくる。

「きゃっ！……やだっ……なにこれ……」

石牢だろうか、そこには鎖に繋がれた全裸の少女が黒い塊のような魔物によって蹴られている姿が映し出されていた。キャロンはその少女の顔を知っていた。ラルの城下町に遊びに行ったときに、たまたま城のバルコニーから民衆に手を振るユリア王女の姿を見ていたのだ。

見るに堪えない映像に生娘のキャロンは目を逸らしたまま二度と鏡を見なかった。

「これがラモー・ルーさ。今もこうやって捕らえたユリア王女様を慰み者にして遊んでいるんだ。他にも掠さらわれていった女性達も同じように……」

「なんてひどい……」

「伝説の剣士として選ばれた君はラモー・ルーを伐ち、捕らえられた王女様や苦しめられていたラルの人達を救う義務があるんだ」

「……」

自分に背負わされた伝説の剣士という立場の深刻さを理解し始めたキャロンは押し黙ってしまった。

再び、廃墟に相応ふさわしい静寂が戻ろうとしたその時……、
ガシャーン！

天窓を破ってフライングマシン三騎が大聖堂へなだれ込んでくる。キャロンを追い回していたラモー・ルーの黒騎兵達だ。

(チッ、黒騎兵め！……いいところを邪魔しやがって)

ペルルはキャロンに聞こえないような小さな声で呟くと、黒騎兵目掛けて猛然と突進し、体当たり攻撃をした。

「戦うんだキャロン！」

ペルルは祭壇の影に隠れているキャロンを叱咤しつたする

「そんな事言ったってえ！」

泣きそうな声で答えるキャロン。

「君の腰にある伝説の剣、リバーズの剣を使うんだ！」

「これが伝説の剣……？」

自分の腰にぶら下がってる短剣を見つめるキャロン。

「キャロン、これに乗って！」

見ると、ペルルは黒騎兵からライティングマシンを分捕ぶんどっていた。

キャロンは斬りかかってくる黒騎兵をなんとか躲かわし、ライティングマシンに乗り込む事に成功する。

「レバーを引いて！」

ペルルに言われるまま、キャロンが操縦桿を引くとライティングマシンは浮き上がり、破られた天窗を抜け、空高く舞い上がる。

「これどうやって操縦するのお？」

半べそのキャロンが叫ぶ。

「もう操縦してるよ！」

「この短剣はおじいちゃんから貰ったもので、伝説の剣なんかじゃないわ」

キャロンにとっては物心ついた頃から普段使ってきた何の変哲もない短剣。いきなり

伝説の剣だと言われても冗談にしか聞こえなかった。

「剣の柄つかを見てごらん、ラル王家の紋章があるだろう。それは間違いないく伝説の剣、リバースの剣だよ。十四年前、ラモー・ルーを倒した七振りのうちのひとつさ」

ペルルに言われて初めて柄つかにある巧たくみな彫刻がラルの紋章だとキャロンは知った。

「おじいちゃんはそのような大事な物をあたしに……なんで？」

祖父ルークがラモー・ルーを倒した七大衛士ななだいえいしの一人だとは知っていたが、そんな重要な物を自分に託していたことに戸惑うキャロン。

そうしているうちに、キャロンの慣れない操縦でフラフラと飛行するフライングマシンはあつと言う間に黒騎兵に追いつかれてしまった。二騎の黒騎兵のフライングマシンは連携し、狼が狩りをするように追いつんでくる。昼ヒユの地ツからはどんどん離れ、夜シヤドルの地の奥深くへと入り込んで行くキャロン達。

黒騎兵との鬼ごっこで、キャロンがフライングマシンの操縦に慣れてきた頃には広大なデイメルンの森はすでに後方、瘴気シヨウキをはらんだ大きな沼も飛び越え、岩石砂漠に突入していた。

砂漠の荒涼とした景色がしばらく続いた後、キャロン達の行く手に奇妙な光景が迫って

きた。

「あれって？……まさか……」

山のように巨大な奇岩が空中に浮いており、その奇岩の周りには家ほどもある岩がいくつも漂っていた。

「……ラモー・ルーの城さ」

ペルルの言葉に今にも回れ右をしたくなるキャロンだったが、追っ手からの逃げ道はラモー・ルー城への方向しか残されていなかった。

ラモー・ルー城の衛兵達がキャロン達の接近に気付き、向かってくる。

「いやーん！　なんでこうなるのお！」

体当たりしてくる黒騎兵をかわしながら、打ち据えられてくる剣をリバースの剣で受け止めながら、ぐるぐると逃げ回るキャロン達だったが、段々と逃げ道を塞がれ、乗っているフライングマシンの翼を時折ガリガリと城壁に接触させていた。

ガキンツ、振り下ろされた黒騎兵の剣をキャロンは間一髪リバースの剣で受け止める。

「きゃっ！」

が、キャロンの手からリバースの剣は弾き飛ばされてしまう。

「あーっ、リバースの剣が！」

ペルルは落ちていくリバースの剣を追ってフライングマシンから飛び降りた。

「ペルルー！」

思わずペルルに手を伸ばしたキャロンはその隙をつかれ、黒騎兵のフライングマシンの体当たりを許してしまう。

「きゃあっ！」

四つある翼の一つが衝撃音と共に吹き飛んでいき、キャロンを乗せたフライングマシンはきりもみ状態になりながら落下していく。

「きゃあああああああああっ！」

ゴモロスの神殿

ラモー・ルーによってユリアが掠さらわれてすぐ、衛士による救出隊が組織された。
しかし、彼等はデイメルンの森に棲む魔物達に苦戦し、かれこれ一ヶ月、森の入り口付近で釘付けになっていた。

魔物の群の最後の一匹に止めを挿すライケ。父の形見の長剣を鞘に収めながら森の向こうに見えるゴモロスの神殿にふと視線を移すと、空に四つの影が見えた。

「……あれは？……、黒騎兵と翼竜？ ……！ 人が追われているのか！」

黒騎兵を振り切るつもりだろう、翼竜キウラが猛烈にスピードを上げ、神殿方向に飛んで行く。ライケは手助けできないもどかしさを感じながら翼竜キウラの動きを目で追っていた。

「違う、そっちじゃない、どうしてそっちへ行くんだ？ ……あっ、危ない！」

ゴモロスの神殿上空で、翼竜キウラから人が振り落とされた瞬間、
「うっ！……」

ゴモロスの神殿が強烈な光を放ち、目が眩くらむライケ。

「うう、……なんだったんだ、あの光は？」
視力を取り戻したライケの眼に、ゴモロス神殿上空で三つの影が旋回しているのが見えた。

ユリア王女救出隊は野営の準備を始めていた。

「ふーん、ゴモロスの神殿の方で人が襲われていたから助けに行きたい、……ねえ。もう死んでるでしょ」

焚き火の前に座り、隊長のマリオが吹き矢の手入れをしながらライケの話を聞いていた。

「お願いします！」

深々と頭を下げるライケ。あの高さから落ちて生きているとはライケも思っていなかった。ただ、隊長のマリオには信用の置けなさを感じていた彼は、ゴモロスの神殿が光った原因を調べに行く言い訳が欲しかったのだ。

「……まあ、この間、正式に衛士になったばかりのヒヨッコ君一人が抜けても問題ないしな、許可しよう。」

皮肉たっぷりと言うマリオ。

「ありがとうございます」

頭を下げ続けるライケを「こいつ嫌味でやってるのか？」と苦々しげに見るマリオ。

「ただし、明日の朝までに帰ってこなければ置いていく」

「分かりました」

ライケはマリオに敬礼するとゴモロス神殿の方へと走り出していった。

「一人分の手間が省けたな……」

マリオはニヤリと笑うと、ライケの背中に狙いを定め、空の吹き筒をフツと吹いた。

大峽谷の底から吹き上がってくる突風に煽られながら、ゴモロス神殿へと繋がる橋を渡るライケ。

「やはり、大峽谷を落ちていってはお助かるまい……」

ライケが峽谷を覗き込むと、大地の裂け目は永遠に続いているかのように深く、谷底は霞んで見えなかった。ライケは子供の頃に聞いたお伽噺に「ゴモロス神殿はあの世に繋がっている」とあったのを思い出していた。

「満更作り話ではないかもな……」

ライケはなんとか無事に橋を渡り終え、神殿内に入ると、辺りを警戒しながら奥へと進んでいった。埃とカビが神殿内を覆っていたが、十四年前のラモー・ルーの襲撃の痕跡は

まだ鮮明に残っていた。

カツン…ライケのつま先に何か当たったりコロコロと転がっていく。拾い上げて見るとそれは青銅製の腕輪だった。腕輪の裏には名前が刻まれていた。

「……ペルル、」

ライケがその持ち主を探すと、すぐに見つかった。柱によりかかるように倒れている白骨体のものであった。

骨の大きさからすると、その骸はまだ子供のようだった。

「ラモー・ルーめ……むごいことを……」

ライケは遺体の前に腕輪を置き、黙祷すると、奥へと慎重に進んでいく。

神殿には大小幾つもの部屋があり、襲撃後に盗賊によって荒らされた部屋もあった。探索を続けるうち、ライケは大きな広間に出た。大聖堂だった。

「なんて立派な聖堂だ……」

ライケは大聖堂の荘厳さに感心しながらも慎重に中へと歩を進める。

「……はっ！」

そこにはつい先まで争いがあったと思われる痕を見つけ、とっさに物陰に身を潜め、周りの気配を窺うライケ。……、しかし大聖堂は静けさを保ったまま。警戒を解き、立

ち上がったライケは柔らかな光をその頬に感じる。

「あそこから……」

見上げると破壊された天窓からラルの四つの月が覗のぞいていた。

「あの光は黒騎兵が火薬玉を使った光だったのだろうか……」

月光によって、大聖堂の中に浮かび上がったように見える祭壇に近づき、その周りをぐるりと一周するライケ。すると、争いで絨毯がめくれ、剥き出しになった隠し扉を見つめる。

重い隠し扉を開け、奥を覗き込むライケの顔に冷たい風がフーツと吹き付けられる。

奈落へ落ちていくような急な下り階段がそこにあった。

そこは神殿の隠し部屋だった。中の様子から、かつては宝物が納められていたのだろう。

「ん……これは？」

徴かびた書物が散乱している中に、古びた鏡台があった。それには見事な彫刻が施されていたが、肝心の鏡は粉々に砕かれていた。

「もしや、これがブレイブ……」

ライケは七大衛士ななだいゑいしの一人であったルークから、ラモー・ルーを封印したブレイブをゴモロスゴモロスの神殿の隠し部屋に安置した、と聞かされていた。

「ブレイブがこんな状態では、ラモー・ルーが復活しているのは間違いないだろう……」
 改めて部屋を見回すと、そこには明らかに盗掘された痕があった。

「くそっ、盗賊共め！ よりにもよってブレイブを破壊したのか！」

ライケは拳を硬く握りしめ壁を叩いた。

暗澹あんたんとした気持ちで野営地に戻ったライケはさらに愕然がくぜんとする。仲間達の姿はそこにはなく、冷え切った焚き火跡が救出隊が出発してずいぶん時が経っている事を示していた。

「いったい、どうして？ まだ朝にはなっていないはずなのに……」

ライケが昼ミユウの地の方角の空を見ると、――夜シヤドルの地では昼と夜の区別がないので、昼ミユウの地ウの空を見て昼夜を確認する――昼ミユウの地ウもまだ夜空だった。

混乱する頭を振りきり、とにかく急いで隊に追いつこうと森の中へと走り出そうとした瞬間、反射的にライケは身構え、背中の剣つがの柄を握る。

眼前の大木の影から熊のような魔物がゆっくりと姿を表した……。

ラモー・ルーの城

「……キャロン……キャロン……」

「うう……」

「起きてよキャロン……」

「ううーん……」

「キャロンてば！」

頭の上から自分を呼ぶ声にキャロンが目を覚まし、身を起す。

「……誰？」

「ペルルだよ！」

「ああ、ペルル……」

「もう何寝ぼけてんだよ、キャロン！ ほら、リバースの剣。ユリア王女を助けに行かないと！」

ペルルがリバースの剣を差し出す。

「えっ……うん」

キャロンは受け取った剣を腰の鞆に戻しながら辺りを見回すと、通路の天井にぽっかりと大穴が空き、夜の地シヤトルの空が見えていた。その下には大破して転がっているフライングマシン。キャロンは運良くラモー・ルー城内に不時着したようだった。

「さあ、早く、こっちだよ！」

まだ頭がぼーっとするキャロンの手をペルルが掴み、強引に引っばっていく。

ラモー・ルー城の奥へへ、しかも暗い方へへとペルルは進んでいく。気付くと真つ暗な通路を壁伝いに歩いていて、キャロンはどこをどう来たのか分からなくなっていた。

「ねえ、ほんとにこっちでいいの？」

「俺の野生の勘がこっちだと言っている」

自信満々に胸を張るペルル。

「ほんとにいい？」

それから暫く進むと薄明かりが見えた。光が見えた事が嬉しくなったキャロンが灯りに向かって早足で歩いて行くと、そこには上へと続く階段の入り口があった。

階段には壁に掲げられた松明たいまつの炎のチリチリという音だけがあり、上からのし掛かってくるような不気味な静けさに背筋が寒くなったキャロンは、踏み出すのを躊躇ためらう。

「ほら上のぼって上のぼって」

ペルルが彼女の尻をぐいぐいと押す。

「やだエッチ！ お尻触らないで」

長い階段を上った先には大きな扉があった。扉は少し開いていて、キャロンがその隙間から中を覗いてみると、鎖に吊された一糸纏わぬ少女の姿があった。

「ユリア王女だ」

ペルルがキャロンの耳元で囁く。

音を立てないように扉をゆっくりと開くと、キヨロキヨロと中の様子を窺うキャロンとペルル。ユリア王女以外、誰も居ないようだ……。

「今のうちに王女様を助けなきゃ！」

キャロンは足音を立てないように、抜き足差し足でユリア王女へと歩いて行く。途中に王女の周りを囲むように溝があり、そこには黒い液体が満たされていた。

「やだ、気持ち悪いわ……えいっ」

溝を跳び越えるキャロン。

「……つとと……きゃっ！」

ドスン！

彼女のジャンプはギリギリで向こう岸に届き、着地で盛大に尻餅をついてしまった。

「あいたた……」

尻をさすりながら、王女の元にごうにか辿り着いたキャロンは、意識を失った彼女の体
にいくつもの紅い痣あざが残されているのを目の当たりにする。

「酷い……今助けますからね」

キャロンがリバースの剣で王女の鎖を断ち切ろうとしたその時、溝の中の黒い液体がザ
ワザワと波立ち襲いかかってきた。

「きゃっ！」

キャロンが咄嗟にリバースの剣で薙ぎ払うと、斬られた黒い液体はブスブスと煙を上げ
灰になって消えていった。

「すごい、これがリバースの剣の力……」

「……ようこそ、我が城へ」

突然、背後から声を掛けられ、ハッと振り向くと、キャロンの足下あしもとの影が山のように盛
り上がり、グニグニとうねりながら人の形に変わっていく。その気味悪さにじりじりと
後退あひざきりするキャロン。

「……っ！」

見る／＼うちに、キャロンの身長は二倍はあるだろうか、黒いマントを着た大男が彼女

の目の前に立っていた。

「……フフフ、我が名はラモー・ルー。この夜の地の主」

キャロンを見下ろすラモー・ルーの隻眼せきがんが紅あかく輝く。

「ラモー・ルー……」

魔王を前に息を呑むキャロン。

「かわいいお嬢さんが我が城に何の御用かな？」

ラモー・ルーの丸太のような右腕がキャロンに掴みかかってくる。

「たあーっ！」

その手を短剣で切り裂くキャロン。

「グオッ！」

ラモー・ルーは斬られた右腕を押さえる。見ると傷口は酷く焼けただけ、煙を上げていた。

「これ以上痛い目を見たくなかったら王女様を放しなさい！」

リバースの剣の威力に勇気が沸いて来たキャロンはラモー・ルーに降伏を促した。

「フフフ、見てくれは勇ましい剣士様だが……」

しかし、ラモー・ルーは怯ひるむどころか、キャロンの瑞々みずみずしい体を舐めるように見ている。

「……太刀筋が素人そのもの」

ラモー・ルーがそう言うと同時にキャロンの足下あしもとの床がゴムのようになり、うねり始めた。不意を突かれたキャロンはバランスを崩し床に倒れ込む。

「きゃあつ！」

ゴムのようになった床から無数の触手が生えだし、キャロンの手足に絡みつく。彼女の体を宙に持ち上げた。

「いやあん、なにこれ！」

触手を振り解ほどこうとするキャロンだったが、動けば動くほど、それらはきつくキャロンを締め上げる。堪らず右手に握られたリバーズの剣が零れ落ち、金属音を響かせながら床に転がっていく。やがてキャロンの力ではどうすることも出来なくなり、ついには蜘蛛の巣に捕らわれた蝶のように彼女は空中にはりつけ磔はりつけになっていた。

「いやっ、放して……っ！」

「フフフ」

悠然と近付いて来るラモー・ルー。キャロンがなお諦めず藻掻き続けていると……

(あっ！)

ラモー・ルーの背後でペルルがリバーズの剣を拾い上げている！

(いいわ、ペルル！ ラモー・ルーはまだ気付いてないわ)

ペルルがリバースの剣を持って彼女の方に飛んでくる！

(そうよペルル、リバースの剣をあたしに！)

近づいて来るペルルと共に訪れつつある好機にキャロンの瞳が輝いた……

(えっ？ うそ……)

しかし、次の瞬間、想像もしなかったペルルの行動に彼女の希望は粉々に打ち砕かれていた。なんとペルルはラモー・ルーにリバースの剣を渡しているのではないか！

リバースの剣を無造作に掴むラモー・ルー。掌てのひらの刃が食い込んだ部分がジュウジュウと焼け焦げていく。

「リバースの剣……、小賢こざかしい物を使いおって」

苦々にがにがしい表情で剣を握りつぶすラモー・ルー。

「どうして……どうしてペルル……」

何が起こっているのか分からず頭が真っ白になるキャロン。

「キャロン、おいらの正体はね……」

ペロリと舌を出し意地悪そうに笑うと、ペルルはラモー・ルーの頭に掴まった。すると彼の形は見る間に崩れていき、ラモー・ルーと同化していった。そして、ペルルの姿がす

っかり消えると、魔王の潰れていた左目がゆっくりと開く。

「伝説の剣士の出現に備え、ゴモロスの神殿に伏せておいた我が分身なのだ」

「ああ、そんな……」

キャロンは声もなくぱくぱくと口を動かすだけだった。

「フッフ、伝説の剣士よ、次はおまえが正体を明かす番だ」

ラモー・ルーが手を翳すとキャロンの胸と腰を申し訳なさ程度に覆う薄い布がドロドロと溶け落ちていった。

「きゃあああ！」

体を舐められているかのようなラモー・ルーの視線にキャロンは鳥肌が立っていた。

「ふむ、一皮剥いてみれば……どこかの村娘と言ったところか」

ラモー・ルーは掌をキャロンの肌てのひらに滑らせる。成長を始めたばかりの小振りな乳房、それなりに括くびれた腰、程好く絞まった下腹、キュツと形の良い尻、しなやかな太股……まるで物を品定めするかのように。

「きゃあああっ！ いやあああっ！」

「誰かに伝説の剣士に仕立てられでもしたのか？」

「いやああああ！ やめて！ エッチ！ 変態！」

キャロンを見下ろしながら、彼女の手触りにニヤリとするラモー・ルー

「まあよい。魔力を完全に取り戻した今のわしには、もう恐れるものはないのだ……それが伝説の剣士だとしてもな、フハハハ」

泣き叫ぶキャロンに意も介さず、今度は指を彼女の秘裂にそわしながら愛撫するラモー・ルー。先とは打って変わって羽箒で触るように……。

「この野趣溢れる体……たまにはこういった娘を楽しむのもよいか、フフフ」

「触らないで！ いやーっ！」

「騒がず……、楽にするのだ……」

キャロンの瞳を覗き込むラモー・ルーの紅い眼あかが怪しく光る。

(ダメ、この眼を見ちゃダメ！)

本能で目を瞑ったキャロンだったが、一瞬遅かった。恐怖心がすうっと消えていき、意識がふわっと浮いた感じになると全身から力が抜けていった。

キャロンは虚ろな目でただラモー・ルーを見ていた。

「……そうだ、力を抜くのだ。そうすれば身も心も気持ち良くさせてやる、フフフ」

ラモー・ルーはキャロンのプルンとした唇をこじ開けるように太い舌を差し込むと彼女の舌に絡めもてあそ弄ぶ。

「んんん……っ、ぐううっ」

小さな乳房の柔らかさを掌てのひらで楽しみながら、キャロンの唇を味わった舌を今度は桜色の乳首へと這はわしていく。ラモー・ルーの愛撫にぴくぴくとキャロンの体が反応する。

「さあ、おまえの蜜壺を見せてくれ」

魔王の声に反応し引き絞られた触手がキャロンの両脚をさらに大きく開き、ラモー・ルーの眼前に少女の白磁のようなクレバスが晒された。

ラモー・ルーの太い指がキャロンのむっちりとした下の唇を押し拡げていく。

「いやあ……ああ……」

秘密の花園を露あらわにされたキャロンが弱々しく首を振る。

「ほう……これはこれは。村娘にしては美しい蜜壺を持つておるではないか」

ラモー・ルーは感嘆の声を上げると、ふるふると震えるキャロンの花卉をじっくりと観察する。

「どれ、おまえの蜜はどのような味がするか……」

そう言うと、ラモー・ルーの体はウネウネと蠢うごめき、徐々に蜘蛛のような魔物の形へと姿を変えていった。幻術に囚われたキャロンはその異様な光景をぼんやりと眺めていた。

魔獣がキャロンの秘裂に舌を伸ばし、チュバチュバと音を立て、キャロンの花卉はなびらを舐ねぶり

蜜を誘う。

「だめえ……いやああ……」

キャロンのヒクヒクと息づく蜜壺から蜜が滴り始める

「出てきたぞ、出てきたぞ蜜が……さあ、どんな味がするのだ？」

魔獣は細い舌を花弁はなびらの奥へと差し込む

「っああっ！んっ、はあっ！」

生まれて初めて胎内への異物の侵入に藻掻もがくキャロン。

窮屈ツァギナな腔うごめをラモー・ルーの舌が蠢うごめき拵ていげていきながら、肉襲にくひたを愛撫する。

「おお、すばらしい！……ううむ！なんと美味しい蜜だ、魔力が湧き上がってくる」

魔獣はキャロンに武者振り付きたくなる衝動を抑え、入り口を傷つけぬよう差し込んだ舌を慎重に操る。

「はあん、はあああっ」

キャロンの唇から甘い吐息が漏れ始め、魔獣はトロトロと舌尖に絡みつく彼女の愛液を味わう。

「この娘、サラと同等か……すばらしい」

ヒクつく花弁はなびらから止め処なく滴る愛液を丁寧ていねいに舐め取っていく。

「次はおまえの蜜壺の具合を確かめさせてもらうぞ、フッフ」

魔獣は無数の細い舌でキャロンの体を舐めまわし愛撫すると、彼女を宙吊りにしている触手に脚をかけ、少女の体の上に覆い被さる。まさにそれは網に掛かった獲物に襲いかかる蜘蛛のようだった。

魔獣の腹部からペニスが顔を出す。それは蛇のようにウネウネと動き回り、キャロンの臍へそや乳房を亀頭で突つつきながら最後にキャロンの唇をこじ開ける。

「んんっ……ぐふっ……ううっツ……」

ペニスがキャロンの口をゆっくりとそして何度も出入りする。……一頻ひとしきり少女の口を犯したペニスは、強張りを見せつけるようにキャロンの目の前でユラユラと動く。

「あああ……」

キャロンの視線を引き連れたペニスが彼女の股間の方に動いていき、亀頭を女陰に擦りつけ始める。

「いやあ……だめえ……」

弱々しく悲鳴をあげ、ペニスを見つめながら頭をいやいやと振るキャロン。

「フッフッフ、では蜜の極みを頂こうか……」

ペニスが花弁はなびらに頭を埋め、徐々にキャロンの膣内なごに侵入していく。

「ああああっ、いやああっ……ああああっ！」

ズヌヌヌツ、体を串刺しにされるような感覚がキャロンを襲う。少女の小さな膣ヴァギナが魔獣のペニスをゆっくりと飲み込んでいき、キャロンが処女だった証が一筋滴る。

ラモー・ルーの前戯で十分に潤っていたキャロンの膣ヴァギナはペニスのリズムカルなピストン運動を生み、彼女の体がそれに合わせ上下する。

「ああっ、はあああッあああッ」

ラモー・ルーの幻術のせいだろう、破瓜の痛みは一瞬で、今は蕩とろけるような感覚がキャロンを包んでいた。

「ああっ、ああっ、ああああっ」

キャロンの瞳に映った紅あかく光る魔獣の眼は、思いがけず手に入れた上物を味わう歓喜に輝いていた。ペニスにもその悦びが動きになって現れ、荒ぶるピストン運動で貼り付けにされたキャロンの体が激しく跳ねる。

ズチュツ、ズチュツ、ズチュツ

「あああッ！ ああッ……っあああ！」

「フフフ、牡この味をしっかりと覚えるのだ」

キャロンの手脚を縛ひまめている触手が枝分かれし、腰に巻き付く。それは彼女の体が跳

ねるのを止めると共にコルセットのように機能した。内臓の動きを制限され、キャロンの処女子宮はペニスの打撃を一身に受け止める。

ズンッ！ ズンッ！ ズンッ！

鐘撞きのように子宮を打ち鳴らされ、快楽の海に漂っていたキャロンの意識が現実に取り戻される。

「ひいっ！ ひっあああああっ！ あああああっ！」

ペニスに女性器を刺られる鮮明な感覚がキャロンに襲いかかる。

(いやあっ！ お腹が！ お腹が裂けちゃう！)

子宮を震わせる一突き／＼ごとの衝撃が体の芯を貫いていく。

「ひぐっ！ ぐひっ！ ひぎっ！」

自分はどうしてこんな苦しい目に遭ってるのだろうか……自分はこのまま串刺しにされて殺されてしまうのだろうか……家に帰りたい……助けておじいちゃん……

キャロンの脳裏に色々な思いが浮かんでは消え／＼していく。

しかし、子宮を激しく震蕩させるバイブレーションがキャロンの思考力を奪い、一方で彼女の感覚を鋭くさせていった。

ドクッ、ドクッ、ドクッ

やがて臍へその下から響いてくる鼓動が熱い快こころよさとなって、体が包まれていくのを感じる
キャロン。

(ああ、もうどうなってもいい……)

深い井戸の底へと引き摺り込まれるように彼女の心は夢心地へと墮ちていった。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！」

すっかり力が抜けたキャロンの体はペニスに好いように貫かれ、二つの小さな乳房がブルブルと上下していた。

「フッフ、そろそろ頃合いか」

そう呟いた魔獣の紅い眼にはキャロンの惚ほろけた顔が映っていた。

「あああつ、うつ、ああああつ、つあああああ！」

ピストン運動の動きが激しさを増していき、ズンと強く一突きするとキャロンの陰なかに魔獣の精液が放たれ始める。

ビュル、ビュツ、ビュルルル

「それ、おまえの体に一生消えぬ性ステイグマ痕を刻んでやろう」

「あああああつ、いやあああああああーっ！」

胎内に浴びせられた熱い逆ほとばしりがキャロンの体に電流が走ったような快感を与え、絹を

裂くような悲鳴を上げさせる。その爆発的なエクスタシーに耐えられずキャロンは気を失ってしまった。そんな彼女を魔獣は構うことなく、精液を少女の体に沁み込ませるように射精を続ける……

宙に磔はりつけにされたキャロンの花弁はなびらから滴り落ちた精液が床に白い斑点を作っていた。

人の形へと姿を戻したラモー・ルーが意識を失ったキャロンの膣ヴァギナに指を挿入し、キュッ、キュッと締め付けてくる彼女の息遣いを楽しむ。

「……これほど素晴らしい蜜を持った娘に出会ったのは初めてだ」

キャロンの肌を手を滑らせながら、彼女の左手にはめられた腕輪を外すラモー・ルー。

「お前達、この娘を石牢に入れておけ……丁重にな」

「御意」

部屋の隅の暗がりから黒いローブを着た二人が音も無く現れると、キャロンの縛めを解き、運んでいく。

ラモー・ルーが手にした腕輪を松明たいまつに翳かざすと、腕輪の紋様がゆらゆらと輝く。

「しかし、ラル王家に伝わる腕輪を何故あの娘が……」

記憶

黒い絨毯じゅうたんのうねりに跨またがったユリア王女の長い髪が踊り、ペニス状触手に貫かれた彼女の股根からは愛液が滴っていた。

「あああつ、あああああ！」

上下するユリア王女の動きが激しくなり、絶頂を迎えた体が弓形に反り、ぴくぴくと痙攣すると、ぱたりと黒い絨毯じゅうたんの上に倒れ込む。

黒い絨毯じゅうたんの一部が小山のように盛り上がると、そこにはラモー・ルーの上半身があった。

「……」

ラモー・ルーがユリア王女の目の前に金色の腕輪を無言で差し出した。それはキャロンから取り上げた腕輪だった。

「……その腕輪がなにか？」

ユリア王女は無関心にラモー・ルーの手の中で煌めく腕輪を見つめていた。

「…………ふむ」

黒い絨毯じゅうたんから生えだしてきた触手がユリア王女の手足を掴み、彼女の身動きを取れなくした。

「…………ああ」

ラモー・ルーの手によって、すっかり肉欲の虜とされてしまったユリア王女はされるがまま、魔王の前に体を捧げる。

ラモー・ルーは小指が失われた左手を出すと、薬指の第二関節辺りを摘まみ、引きちぎった。

「フフフフ…………」

薬指をユリア王女の秘所へと挿入するラモー・ルー。

「ああ……………はあああ、…………」

ユリア王女の膺ウアギナに入れられた指が芋蟲いもむしのように動きモゾモゾと奥へと入っていく。

「ああ……………いや……………」

ラモー・ルーの指がユリア王女の子宮ホルチオ口をこじ開け、中へと侵入していくと、子宮と融合していく。ユリア王女の滑らかなカーブを描く下腹部に紫色の淫紋が現れると、内臓を驚づかみにされるような強烈な快感が彼女を襲う。

「あつ、く……ああああつ！ ……ひっ、ああああつ！」
 長くか細い悲鳴を上げ、失神するユリア王女。と同時にラモー・ルーの頭の中に王女の記憶が流れ込んでくる。

「見えてきたぞ、ユリアの記憶が……」

ラモー・ルーは体の一部を他人に寄生させ、その人間の意識を読む事ができた。

王女の意識の中を彷徨い腕輪の記憶を探るラモー・ルー。

しかし、手がかりは掴めない。たわいない記憶ばかりが見えてくる。

「ユリアは只一人残った王家の者。秘密は必ず伝えられているはずなのだ……」

ラモー・ルーはどんどんと時間を遡り、ついには彼女が生まれたばかりの頃の記憶に辿り着いてしまう。

「何故、この娘には王家の秘密に纏わる記憶がないのだ。何も知らされていない……そんな馬鹿な事があるのか？」

諦めようとしたその時、ラモー・ルーが見知った顔がぼんやりと浮かんできた。

「これは……忌々しい七大衛士……」

衛士の一人が腕に抱く金髪ななだいえいしの赤ん坊が見え、その小さな手には金色の腕輪を握っている。

「むっ、あの腕輪は……」

ラモー・ルーがユリアの記憶に集中すると会話が聞こえてきた……
金髪の赤ん坊を抱いた衛士が言う。

「今後もラモー・ルーの残党に狙われるやも知れん。いや、また別の者にも狙われる事も考えておかねば。女神の力を守る為にも王女様は隠さねばならん」
頭の上から声がする。おそらくユリアを抱いている者の声だろう。

「不憫だが、この子には王女の替え玉として生きてもらおう」

「戦災孤児が王女の生活を一生送れるのだ、それで勘弁してもらおうしかない」
意識を自分へと戻すラモー・ルー。

「フッフ、なるほど、替え玉か……考えたものだ。赤子の頃に入れ替えたのならユリアが知らぬのも道理だ」

ラモー・ルーは立ち上がり、部屋の隅に座った鏡使いに命令する。

「鏡使いよ、あの娘を映すのだ」

鏡使いが静かに掌てのひらを動かすと、物見の鏡に映ったのは粗末な寝台に横たわったキャロ
ン。ベッドからこぼれ落ちた彼女のポニーテールが薄暗い石牢の中で黄金色こがねいろに浮かび上
っていた。

「ククク、腕輪を持っていたあの乳飲み子がこの娘とは……。巡り合わせというものは

分からぬものよ」

キャロンの腕輪を頭上に掲げ、勝ち誇ったように笑うラモー・ルー。

「フハハハ！ 七大衛士共よ！ ラルの王女は確かにわしが頂いたぞ！ グハハハハ！」

第二部

ラモー・ルーの夜

ラモー・ルーの夜 第一夜

ラモー軍団は捕虜を捕らない。「敵兵は皆殺し」を常としているからだ。しかし、ラモー・ルー城内には多くの石牢があった。それは昼の地から掠ってきた魔王への貢ぎ物達を閉じ込めておく為に作られたものだった。

その石牢のひとつ、中に設えられた粗末な造りのベッドの上にキャロンは寝かされていた。

「……うううん……ここは……?」

キャロンが目を覚ます。

石牢内にこもったカビ臭いにおいに顔をしかめるキャロン。その嫌な臭いが気付け葉代わりになり、だんだんと意識がはつきりしてくる。

ベッドの上で身を起こしながらキャロンは鈍い重さを感じる。見ると手首足首には枷がはめられていた。そのまま視線を滑らすと体に身に付けている物はなにもなく、ラモー・ルーに強姦された時のままだった。

「……痛っ」

彼処に処女を奪われ陵辱された痛みが走り、悔しさに唇を噛むキャロン。しかし、その痛みは何故か心地よくも感じられ、彼女を戸惑わせていた。

(痛いのにな……どうして……)

ギッ、ギ、ギギイ

突然、石牢の重い扉が開き、黒いローブを着た二人が入ってきた。

「あっ！」

キャロンは慌てて両手で体を隠すと二人を睨みつけた。

「ラモー・ルー様がお呼びだ」

そう言いながら、黒いローブは彼女を連れ出そうと掴みかかる。

「いやっ！ こっちにこないで！」

両腕をブンブンと振り回し抵抗するキャロン。

黒いローブは少女のささやかな抵抗をいかくぐり、指先でキャロンの額を軽く触るとそこには小さな紫の紋様が付いた。そして次の瞬間、キャロンの体から力が抜け、まるで操人形の糸が切れたかのように、その場にパタリと倒れてしまった。

(……なにこれ？ ……やだ)

キャロンは体が痺れて動かない、声も出せない。魔力によって麻痺させられたのだ。

黒いローブ達はキャロンを抱え上げ、石牢から運び出す。

大きく脚をM字に開かされた格好で輿こしに載せられたキャロンがラモー・ルー城の大回廊を運ばれていく。魔力で動いているのだろうか、輿こしは担こぎ手もなく宙に浮かび、先を歩く黒いローブの二人についていく。

大回廊を行き交うラモー軍団の魔物達はキャロン達一行いっこうに気付くと道を空け、その場にひざまず跪ひざまずき頭こうべを垂れる。キャロンが主あるじであるラモー・ルーへの貢ぎ物だと解っているのだ。

しかし、魔物達のギラついた眼はじつと少女の柔肌を見つめ、舌なめずりしていた。

体の自由を奪われたキャロンはその辱はずかしめはめに為すすべもなく、ただ一筋の涙を流すしかなかった。

キャロンが運ばれて来たその部屋は、湿気を帯びた石壁で囲まれ、天井を支える石柱には大蛇の像が彫刻されていた。壁に掛けられた燭台の炎の揺らめきが彫刻の影をゆら／＼と動かし、大蛇が生きているかのように錯覚させた。

部屋の中の生暖かい籠すえた空気がべつとりと全身に絡んでくるような感触が、魔物に吐息を吹きかけられているようで、キャロンは鳥肌が立った。

「お待たせしました。ラモー・ルー様」

部屋の中央、床石の隙間から黒い液体が滲み出してくる。すぐにそれはドクドクと脈動するように湧き出し始め、やがて液体は徐々にドロドロとしたゲル状に変化すると山のよりに盛り上がり、ゆっくりと人の形を成していき、……ついにはラモー・ルーがそこに立っていた。

「……っ！ ……っ！ ……っ！」

犯された時の恐怖と悔しさと、今また再びラモー・ルーに穢される絶望がない交ぜになった感情から声にならない声を出すキャロン。

「待っておったぞ、伝説の剣士どの……いや、その麗しき姿、姫君と呼ぶ方が良いかな？ フフフ」

黒いローブの一人がキャロンを輿から降ろし、彼女の両手両足にはめられた枷を天井から何本も垂れ下がっている鎖に繋ぐ。それを確認したもう一人が壁から生えた数本の取っ手のひとつを下に押し込むと、壁の裏からギツギツと歯車が動いているような音が聞こえ始め、……ジャラリ、キャロンの両腕に繋がれた鎖がゆっくり引き上げられた。

黒いローブは空中にYの字の形に吊り下げられたキャロンに近づくと、指先で額に触れた。するとキャロンの額にあった紋様が蒸発するように消え、同時に彼女の体の感覚も元

に戻った。

「くっ……放して！ いやーっ！」

体の自由を取り戻したキャロンが縛めから逃れようと体を揺する度、ガチャガチャと鎖が鳴る。

「体力は十分に戻っておるようだな。フッフ」

ラモー・ルーがキャロンの顔を覗き込む。

「いやっ、近寄らないで！」

顔を背けるキャロンの両頬を片手で掴み、グイッと自分に向けさせるラモー・ルー。

「怖れることはない、これからじっくり可愛がってやろうというのだ」

妖しい光を湛えたラモー・ルーの眼に、はっとするキャロン。

(だめっ！)

魔王の幻術に捕らわれまいと、キャロンはきつく目を閉じる。

「おまえに幻術はもう必要ない……フッフ」

そう言うと、ラモー・ルーはその太い舌で強引にキャロンの唇をこじ開け、彼女の舌に絡ませる。

「うっ、んぐっ……あぐっ……」

ねっとりとしたラモー・ルーの舌の動きに翻弄ほんろうされるキャロンの舌。しかし苦痛はなく、その動きはキャロンにディープキスを教えるかのようにであった。

「……んっ、あああっ……はあ、はあ、はあ……」

長い口淫を終え、キャロンの唇を解放したラモー・ルーの舌はキャロンの耳から首筋へと一舐めすると、まだ成長途中の小振りな胸を次の獲物に定める。

今度は蛇の様に長く伸ばされた舌が乳房に巻き付く。

「ああああっ！」

キャロンの胸にボタボタと滴り落ちた唾液がローションとなって、ヌルヌルと乳房を絞しぼるような動きを繰り返しながら、舌尖ではチロチロと乳首を刺激する。

淫みだらで執拗なマッサージに、キャロンは乳首を硬く尖らせてしまっていた。

「はああ……だめえ……いやああ……」

そのタイミングを待っていたかのようにラモー・ルーの細長い舌がすばやく乳首に巻き付き、きつく締め上げる。

「きやああああ……あん……！」

悲鳴を上げるキャロン。しかしその悲鳴には艶つやが混じり始めていた。

キャロンの体をその大きな両手で掴み、舐め回しながら、ラモー・ルーは部屋の隅すみに控

える黒いローブに目配せをする。

壁の取っ手を操作する黒いローブ。キャロンの足枷の鎖がギシギシと軋む金属音と共に巻き上げられていった。

キャロンは空中で大きく脚を開いた体勢にされ、丁度ラモー・ルーの顔の前にキャロンのぷっくりと合わさったクレバスが位置していた。

「い、いやああ……」

「おまえの蜜壺はどうなっておるか、見せてもらおうか？フッフ」

ラモー・ルーは指に唾液を絡めキャロンのクレバスに沿って愛撫する。程なくそこはピチャピチャと淫らな音を立て始め、顔を覗かせたクリトリスを舌尖で撥る。

「ひっ、あああっ！」

指の腹で擦り上げながらゆっくりと花卉が開かれていくと、ヒクヒクとヒクつくキャロンの蜜壺の入り口が現れ、見た者を誘惑するかのよう愛液が滲み出していた。

「美味そうな蜜が滴っておる、フッフ」

ラモー・ルーがキャロンにむしやぶりつく。

ブチュル、ジュルル……

下品で大きな音を立てながらその可憐な花卉を舐め上げていく。

「だめえっ……ああああ」

さらに蜜を求め、ラモー・ルーの太い舌がキャロンの蜜壺の奥へと侵入していき、
「ああああっ！」

胎内でうねるように蜜を吸い取っていく。

「なんと甘美な蜜であろうか……」

「ああっ、あああああん！ いやあああっ」

激しいクンニリングスから逃れようとキャロンは体を揺らす、ラモー・ルーは彼女の腰を両手でがっちり掴むと、舌を細長く変形させ、膣内を探るように動かす。

「っああ……ああああっ！ ……ああ……っあああん！」

キャロンのGスポットを探り当てたラモー・ルーはそこに攻撃を集中する。

「ああ！ ああっ！ いやああっ！ ……ああっ！ ああああっ！」

体突き抜けていく未体験の快感に、キャロンの意識が飛んでしまいそうになったその時……、

プシュッ、プシヤアアアッ！

「はっ、あ……あああああああー！」

キャロンの花卉はなびらから液体が勢いよく噴き出す。体の痙攣けいれんに同期するように潮が吹き上が

り、ラモー・ルーの顔を濡らす。それを一滴も残すまいとラモー・ルーの舌が舐めとっていく。

「すばらしい……蜜だけではなく、なんと甘美な聖水を持っておるのだ」

初めてオルガスムスを迎えたばかりか潮まで吹いてしまったキャロンは、自分の体に何が起こったのか分からず放心状態にあった。

「はあ……はあ、はあ、ああ……はあ」

ラモー・ルーはキャロンを繋いでいる鎖を解くと、彼女の体を石造りの丸い台の上で大の字に横たえた。

「まだ足らぬであろう？　すぐに次をやろう……」

ラモー・ルーはキャロンの乳房を揉みしだくと、彼女の小さな体の上に覆い被さる。

「あああ……」

ヌルヌルと何かが触っている下腹部へキャロンが目を向けるとラモー・ルーがペニスで彼女の恥丘を愛撫しているのが見えた。

(いやよ、もう二度と犯されたくない……)

そう思っても体は痺れたようになっていて、ラモー・ルーを拒むことが出来なかった。

(あの眼を見てしまったからだわ……悔しい……)

キャロンの目から涙が零れる。

グチュル……

亀頭がキャロンの蜜壺の入り口に埋まったところで挿入が止まる。

「ひっ……くっ！」

ペニスに比べて入り口が小さいこと、キャロンが挿入を拒んで息んでも相まって、ペニスの侵入は阻まれていた。しかし、キャロンが息を吐き、息みが抜ける一瞬をラモー・ルーは見逃さず、ペニスを殺到させ、子宮口に強力な一打を加える。

「あああああっ！」

ラモー・ルーはリンリンと鈴が鳴るようなキャロンの悲鳴を楽しむと、少女の膣の締めまり具合を味わうように、ゆっくりりとペニスを前後させ始める。

グジュツ、グジュツと淫靡な音を立てながら、雁首が少女のまだ初々しい肉襞を搔きむしる。

「ああっああっああっ！」

ラモー・ルーはねっとりとした動きでキャロンの体に牡の味を覚え込ませていく。

「力を抜き、体を委ね、感じるのだ。お前の膣内に入ってるモノを……」

時折、外に顔を出す亀頭は愛液にまみれ、トロトロになっっていた。

「あん！ ああ！ いや、ああっ！ あん！ あん！」
 キャロンの流す愛液が程好い潤滑油オイルとなって、ピストン運動が徐々にリズムカルなものへと変化していく。

ラモー・ルーはキャロンの膣ヴァギナがペニスに馴染んできた事を見定めると、挿入を深くし子宮口ホルチオを亀頭で叩き始めた。

「いやあつ！ あんっ、お腹が……お腹が裂け……ちやう！ やめてえ……あんっ」
 ズツ、ズツ、ズツ！

子宮に亀頭が激しく打ち付けられる痛みで、キャロンの意識はラモー・ルーとの結合部に集中する。

(痛い……痛い……いたい……いたきもちいい……気持ち良い……)
 キャロンが痛みに集中すればするほど、痛みが心地よさに……否、快感に変わっていった。

(どうして……痛いの気持ちいいの？ ……嫌なのに……嫌なのに……気持ち良い)

「ああああ…… ああああん……」

キャロンの唇から悦びの吐息が溢れ出す。

「良い具合になってきたようだな、フッフ」

「あん！ あん！ あん！ あん！ あん！ あん！」

ラモー・ルーはキャロンの腰を持ち上げ、彼女の膣ヴァギナが天井を向くようにすると、更に深く強くペニスを挿入する。

ズン！ ズン！ ズン！

子宮に杭を打ち込まれるような暴力的な挿入。しかし、それは再びキャロンを絶頂へと導いていった。

「ああっ、ああっ……きもち、いい……あっ、あっ！ あああああっ！」

激しいピストン運動が少女の純心の殻に穴を開け、そこから流れ込んだ淫欲がキャロン心を包んでいく。

「ふああああっ！ きもちいい……きもちいいの……はああああっ！」

恍惚の表情を浮かべるキャロンにラモー・ルーは暫し見とれてしまっていた。

「フフフ、少女が牝に変わる瞬間は何度見ても飽きない……」

ペニスを激しく動かしながら、彼女の頬を慈しむように撫でるラモー・ルー。

ラモー・ルーのペニスがドクドクと大きく脈動し始める。

「いっ、く……ああああああああああああっ！」

キャロンのオルガスムスに合わせラモー・ルーが彼女の膣内なかで射精する。

「あああ、あああ熱い……ああ、あ……熱、いい……はああ……」
 熱い逆ほとばしりに子宮口ポルチオを焼かれる快感に、キャロンは激しく体を震わせていた。

「ああ……はあ……ああ……」

石台の上で大の字になったキャロン。まだ幼い体に施された激しい性儀の余韻で彼女は放心状態にあった。

「見込んでた通り、わしとの最初のまぐわいで体はすっかり牝へと堕ちておったわ」

キャロンの花卉はなびらから溢れ落ちる精液を指で掬い取るとニチャニチャと指先で弄ぶラモー・ルー。

「しかし、心は未だ純潔を保っているようだ。……フフフ、面白い。」

そして、彼女の薔薇色に上気した唇へ精液を塗っていく。

「これからお前の心をじっくり牝にしていく楽しみが増えた、フフフ。……今宵こよひはここまですべておこう。牢に戻しておけ」

ぐったりとしたキャロンを輿こしに載せると、黒いローブ達はラモー・ルーに一礼し、部屋から出て行く。

元来もとた道を進む、黒のローブ二人とキャロンを載せた輿。

体が自分のものでなくなるような、意識が飛んでしまうような快感を初めて体験したキヤロンは、未だその熱^{ほとほ}りから醒^さめず茫然自失していた。そのため、来た時と同じ淫^{みだ}らな姿^さで輿^{こし}に乗せられていても恥^はじらうことなく、再びその幼くも美しい体は大回廊を行き来する魔物達への見世物となっていた。

キヤロンから漂^めう牝^{めす}の臭いに誘われ、一つ目の魔物が近寄ってくる。

「その娘、俺にくれ」

「控えよ！ これはラモー・ルー様のものぞ」

「ラモー様が手を付けた後は俺たちがいただけのはずだろ？ 俺によこせ！」

魔物は輿^{こし}の上のキヤロン目掛けて腕を伸ばす。

「やめよ！」

黒いローブのひとりがそう言った瞬間、電撃が走り、魔物の片腕が消し炭になっていた。

「ギャアアアアア！」

大回廊に響く魔物の悲鳴を後に何事もなかったようにキヤロンを載せた輿^{こし}は進んでいく。

ラモー・ルーの夜 第二夜

キャロンの石牢に黒いローブ達がやって来る。

「食事だ」

差し出された食べ物に、キャロンは囚とらわれてからまともに食事をしていなかった事に気が付き、急に空腹を感じ始める。しかし、ラモー・ルーに施ほどこしなど受けたくないという意地もあって、手を出さずにいた。

「……食べ終えるまで見張っている」

そう言うと、黒いローブ達は入り口の扉の前に微動だにせず立ったまま。

「……！」

ここにずっと居られるのは堪たまらない、とキャロンは慌てて与えられた食べ物を喉のどに押し込む。パンに具たけだくさんのスープと果物、意外にも出された食べ物は普通で美味しかった。そして飲み物のヨーグルトのような物……これは嫌な味がしたけれども。

キャロンが食べ終えたのを見届けると、黒いローブが彼女が今まで見たこともないエキゾチックな履き物を差し出す。

「足を痛めぬよう、これを履いておくように」
それはアッパーが爪先と踵で分かれているセパレートパンプスで、金の縁取りで装飾されていた。

(これじゃ、裸足と変わらないんじゃない?)

靴と言えば、野良仕事で使う革のブーツくらいしか知らない村娘のキャロンにとって、その履き物はあまりにも頼りなげに感じた。

「……き、着る物はないの?」

パンプスを履きながらキャロンは恐る恐る尋ねてみた。

「……」

黒いローブ達は無言で去って行く。

「なによ! 真っ黒くろすけ!」

閉じられた扉に向かって悪態をつくキャロン。

再び黒いローブ達がやって来る。

「ラモー・ルー様のお相手の時間だ」

その言葉に総毛立つキャロン。

「いやっ！」

黒いローブ達は拒むキャロンを例の如く紫の紋様の魔力でおとなしくさせると、輿こしに載せる。ただ、此の間と違っていたのは輿の椅子に座ると、椅子から細長い触手が左右から伸びてきて、キャロンの肉付きのいいクレバスを広げ、花卉はなびらを露あらわにした。

「……っ！ ……っ！」

体を麻痺させられたキャロンには、更なる辱はずかしめに悲鳴を上げることすら許されていなかった。

松明の光が輿こしの上のキャロンの肢体を大回廊の薄闇の中に白く浮かび上がらせていた。さらさらと揺れ輝く金髪ポニーテールに、小振りな乳房に、下腹部に、太ももに魔物達の視線が突き刺さってくるのを肌で感じるキャロン。そして、魔物達の眼前に無防備に曝さらけ出された桜色の花卉はなびらがふるふると羞恥しゆうちに震える。

再びあの部屋がキャロン達を迎え入れる。

黒いローブ達は跪ひざまずき、頭こうべを垂れ、ラモー・ルーの登場を待つ。しかし、彼等の主はなかなか姿を現さない。

部屋に漂う嫌な肌触りのする空気、輿こしの上に淫みだらな格好で載せられている自分。それらが今までラモー・ルーによって施ほどこされてきた性の儀式をキャロンに思い出させ、魔王に対する嫌悪感つが募る。一方で心臓がとくとくと鼓動を早めていき、臍へその下辺りがじん、としてくるようにも感じていた。

どれほどの刻ときが経っただろう、

「今宵はもうよい……」

どこからともなくラモー・ルーの声が部屋に響く。

「……御意」

その夜は何事もなく石牢に帰されるキャロン。

次の日――。

あの部屋への道すがら、少女の輝くような肢体しんたいに惹ひき寄せられ、三匹の魔物がキャロンの輿こしの前に立ち塞がる。

「我々はラモー様の生贄いけにえの間まへ行く途中だ。そこをどけ」

「へへへ、それを俺達によこせよお」

「どうせラモー様はもう飽きたんだろお？」

「よこしてくれたら、代わりに……」

魔物達の言葉を遮るように黒いローブがさっと手を振る。と同時に三匹の魔物の姿がその場からかき消えた。

黒いローブが辺りの魔物に向かって威嚇する。

「皆の者！ 今を見たであろう！ ラモー様の物に手を出す事がどのようになるか。肝に銘じておけ」

周りの魔物達は三匹の魔物の行方を知っているらしく、大回廊はしんとする。

黒いローブと三匹の魔物との会話である部屋は「生贄の間」と呼ばれている事をキャロンは知り、陰鬱な気分がさらに酷くなった。

キャロンが生贄の間に到着する。……しかし、その日もラモー・ルーは現れなかった。

三日目――。

石牢には明かり取り用の小さい穴があったが、ここは夜の地、月の光と星明かりしか差し込まず、昼なのか夜なのか、はっきり分からなかった。しかし、黒いローブ達が定期的に食事を運んでくるので、キャロンはなんとなくではあるが、一日の時間の流れが解り始めていた。

ラモー・ルーに呼ばれる夜がやってきた。

「ラモー・ルー様のお相手の時間だ」

……だが、その夜もラモー・ルーは姿を見せなかった。

石牢に戻され、ベッドで横になるキャロン。あられもないもたない格好で輿こしに載せられ、魔物達への見世物にされてはいるが、その体をラモー・ルーに穢けがされる事なく無事に帰れたというのに、何故かなかなか寝付けなかった。

四日目の夜――。

今日も夜伽よとぎの役目は免れ、石牢に戻されていくキャロン。

大回廊の脇でキャロン達を見送る魔物達のひそひそとした話し声が渦うずとなって聞こえてくる。

……あんだヨ、今日モお手付きナシカ？ あんなに乳首をおっ立ててンのによオ……もう飽きたンなら、俺達に回してくれたりいいのに……まだ子供みたいな顔して、体はいっちょ前に牝おとこを誘ってやがる……あの小ちっこいおまんこが垂らしている牝汁めすじの臭い、堪たまんねえ……今すぐ俺のをブチ込みてえ……

裸体を晒し、魔物達の視線を感じることに恐怖とは違う別の感情がキャロンの中に芽生

五日目の夜――。

輿こしから降ろされ、黒いローブ達が去ったあと、ベッドに横になるキャロン。

「……今日も会えなかった」

……と、自然と口をついて出た自分の言葉にキャロンはハッとする。

(いやっ！ あたし、なんてことを！)

頭をふるふると振り、こんな異常な生活の毎日で「たまたまおかしな事を言ってしまったのよ」と自分に言い聞かせ、ぎゅっと目をつむると無理矢理に眠ろうとするキャロン。

しかし、目を閉じていると、ラモー・ルーのいやらしい指、舌、そしてあの穢けがらしいペニスペニスが自分を犯す光景が頭に浮かんでしまう。「そんなことは思い出したくない」と他のことを考えようとするキャロンだったが、あろうことか今度は激しく陵辱レイプされる自分を想像してしまっていた。

(いやっ……こんなの……)

やがて、ベッドで横になっているキャロンの体かもぞもぞと動き始める。

キャロンは両手で乳房を揉んだり、時折、指で乳首を摘つままむようにいじっていた。

「ん、……あっ……あ」

キャロンの唇から吐息が漏れ始めると、するすると彼女の右手が可愛らしい臍へそから下腹部へと滑り落ち、その先にあるクレバスを押し開くと、花卉はなびらをくりくりと回すように愛撫を始める。くちゆくちゆという湿った音とともに愛液あふが溢れてくるのに時間はそうはかからなかった。

キャロンは人差し指でクリトリスを刺激しながら中指を自分の膣なかへ差し込む。

「んっく！ ……あああん……」

ヴァギナ膣なかに入れ入る指は最初は控えめな動きだったが、だんだんと奥へ／＼と挿入いれていき、ついにはラモー・ルーが探り当てたGスポットを掻き回すように刺激していた。

「んっ……だめっ……ああん！ ……あああっ！ ……」

自分で自分をイカしてしまったキャロンの嬌声が石牢の中に響く。

「ああ……はあ……あ……」

自分の体を撫でながらオナニーの余韻ひたに浸るキャロン……

「………っ！」

突然、キャロンはぱっと身を起こすと周りをキョロキョロと見回す。誰かの視線を感じたのだ。しかし、この狭い石牢の中には自分以外誰もいるはずはなく、「気のせいよね」

と静かに眠りにつくキャロン。

物見の鏡の前で鏡使いが呪文を唱えると、鏡面に波紋が広がり、その揺らめきがおさまると、さつきまで鏡に映っていた鏡使いの姿は消え、代わりにオナニーをするキャロンの姿があった。鏡はまるでキャロンが眼の前に居るかのよう鮮明に映し出していた。彼女が蜜壺を掻き回している音が聞こえてきそうなほどに。

鏡を眺めるラモー・ルーは嬉しそうに舌舐めずりをしていた。

七日目——。

(昨夜ゆうべしたばっかりなのに……)

朝起きてしばらくすると、また体がどうしようもなく疼うずいて、キャロンは自分の体が自分のものではなくなったように感じていた。

(また今日もあの恥ずかしい乗り物に載せられて、魔物達の汚けがらわしい眼があたしを舐め回すように見て、その後、あたしはラモー・ルーに……)

またそんな考えが膨みだらんできて、じんじんと熱くなる体の求めに抗あらがえず、いけないと思っみだっていても淫みだらに指を動かしてしまいうキャロン。

「あん……はあん、……あああっ」

そして、キャロンはまた誰かの視線を感じつつも、自分を慰め続けていた。

「ラモー・ルー様のお相手の時間だ」

黒いローブ達が石牢の扉を開けると、そこには頬ほほを薔薇色ばらいろに染め、とろんとした表情のキャロンが待っていたかのように立っていた。

「……」

コクリと頷くと石牢の前に浮かんでいる輿こしの方へと自ら歩いて行くキャロン。黒いローブ達は昨日までとは打って変わって貴人に傳かたずくように輿こしへの乗り込みを手助けする。黒いローブ達の眼前を通り過ぎる桜色の乳首はピンと上を向くように尖っていた。

脚をM字に大きく開かないと座れない形になっている輿こしの椅子にキャロンは躊躇ためらうことなく体を預ける。と、同時に触手が——、ラビアクリップと黒いローブ達は呼んでいた——彼女のクレバスにもぐり込むと、にちっ、という湿った音と共に陰唇を左右に広げ、少女の初々しい女陰を剥むき出しにした。

「あん……」

小さくではあるが艶つややかな声を出すキャロン。回廊の燭台に照らされた彼処はもう十分

に潤んでいた。

大回廊をキャロンを載せた輿が進む。

(ラモー・ルーに会いたい……)

その思いが今のキャロンを支配していた。輿の上から大回廊を見渡し、魔物達の中に居るはずもないラモー・ルーを探しながら、「あたしはここに居るわよ」とばかりに女陰を見せつけるようにキャロンは腰を前後にゆっくりと揺らす。彼女の小陰唇は鮮やかな桜色をし、小さなクリトリスははち切れんばかりに勃起し、膣からはトロトロと愛液を溢れ出させていた。

そんなキャロンの淫靡な姿に魔物達の目は釘付けになり、道を空け跪く事さえ忘れさせていた。

しかし、今夜も生贄の間にラモー・ルーは現れず、キャロンは石牢に戻されていた。消える事のない体の火照りに気がおかしくなりそうになるキャロン。それを少しでも鎮めようとベッドの角に陰部を擦りつけようとしたその時……、

「その美しい体を粗末にすることは許さんぞ、キャロン……」

背後からの声に驚き、飛び退くキャロン。

見るとそこにはラモー・ルーが立っていた。

キャロンは石牢の扉に駆けよるが、そこはいつものように固く閉ざされていた。

「何を逃げておる。わしに会いたかったのであろう？」

「誰があんたなんか……」

ゆっくりと近づいてくるラモー・ルーから一定の距離を保ちつつ、壁伝いにじりじりと後退りするキャロンだったが、すぐに石牢の隅に追い詰められる。

それ以上逃げ場がなくなったキャロンは小さく縮こまっていき、最後にはぺたんと尻餅をつく。

「強がるでない、フッフ」

ラモー・ルーの太い腕がキャロンを強引に抱き寄せる。その口から毒蛇が這い出してきたかと錯覚するような長く赤い舌がキャロンの頬を、耳元を、首筋を、鎖骨のあたりを舐める。

「きやあつ……」

「わしが欲しくてたまらんのだろう？ 正直に言えば普通では味わう事のできぬ、あの快楽の世界を見せてやるぞ？ フッフ」

キャロンを抱きすくめている大きな手が少女の弾むような背中の筋肉の感触を味わいながら、そのまま体のラインに沿って下に滑っていき、尻たぶを掴むとその柔らかさを楽しむ様に揉みしだく。

「いやっ……離して……」

キャロンのその声は小さく、ラモー・ルーから離れようともかくその腕には、力が入っていないかった。

「まあよい、お前の体はすでにわしの虜。そちらに聞いてみるとしよう、フッフ」

ラモー・ルーの顔がキャロンの顔に近づく。いやいやをするように顔をふるキャロンの唇を追いかけるようにラモー・ルーの舌がむしゃぶりついていく。

ピチャツピチャ……、ブチュルヂュル……、

ディープキスの音が激しくなるにつれ、ラモー・ルーの腕の中のキャロンはおとなしくなっていく。

「んっ……あむ……っ……ん……くっ……」

気付けばラモー・ルーの太い舌に自分の舌を絡ませ口淫に夢中になっているキャロン。ラモー・ルーがキャロンの下腹部に右手を這わすと、キャロンはそれを待っていたかのようにもじもじと腰をくねらせ、陰部を擦りつけてくる。

不意にラモー・ルーはキャロンから体を離し床に胡座する。

「ああん……………、あつ、」

思わず不満の声を漏らしてしまった自分に動揺するキャロン。

そんな彼女に向かってラモー・ルーは愛液に濡れた右掌を差し出すと、指を波打つように動かした。

「フフフ、それ、好きなように使ってみろ」

「……………」

キャロンは躊躇いながらも突き出された腕に跨がるように立ち、魔王の肩に手を置くと、伏し目がちに腰を落としていく。

「はああん……………、ああああん……………あああ、」

掌の上でキャロンの肉厚の大陰唇がむちむちとつぶされ、開いた花卉がぐいぐいと指に擦りつけられる感触を楽しむラモー・ルー。一方、魔王の胡座の中央では固く強張った陰茎がキャロンの痴態を見上げていた。

「あああつ……………、ああああん……………」

もっと刺激が欲しいとばかりに、激しく腰を振り始めるキャロン。

それに応じるようにラモー・ルーはキャロンの充血したクリトリスを親指で潰すように

グリグリと刺激する。

「あん！ あんっ！ ……あああ……っ！」

キャロンは押し寄せてくる快感の波に、もはや自分の力では立っていられなくなり、ラモー・ルーの胸に上半身を預ける。魔王の肩をぎゅっと掴み、はあはあと呼吸を荒らげるキャロンの瞳はうっとりとしてラモー・ルーの顔を見つめていた。

「っああああああっ！」

一際大きな嬌声が石牢に響く。見るとラモー・ルーの人差し指と中指がらせん状に絡まり一本の肉棒となつてキャロンの肉壺を突き上げていた。

煽情的な光景とは裏腹に、ぱんぱんぱん、と間の抜けた音が石牢に木霊する。

「っ、はああああああ！」

ラモー・ルーの指を使ってイッてしまったキャロンが床に座り込む。

「まだまだこんなものでは満足できぬだろう、んん？」

ラモー・ルーはキャロンの腕を引っ張り上げると、壁に両手をつかせ、尻を突き出した姿勢にさせる。さらにキャロンの太ももを掴み、脚を広げ、膣、尻穴を丸見えにした。

「あああん、……はああん……」

恥ずかしい姿勢を取らされたキャロンが甘い悲鳴を上げ、その声にシンクロするように、

小さなヴァギナ膣はなびら口がパクパクと閉じたり開いたりしていた。

「形の良い尻に可憐な花卉はなびら、美味い蜜をた湛えた蜜壺、尻穴も愛らしくヒクついておるではないか。実にそそられる……」

ラモー・ルーは突き出された尻を両掌りょうてで円を描くように愛撫しながら、ペニスの雁首をヴァギナ膣はなびらにクチュクチュと擦りつける。

「ああ……ん、いやあ……きて……え……」

そろそろ頃合いと、ラモー・ルーは背後から一気にキャロンを貫き通す。

「ああああああっ！」

初めて経験する後からの深い突き上げにキャロンは悲鳴と嬌声が混じった叫び声を上げた。

ラモー・ルーがキャロンの下腹部を掌でグリグリと圧す。そうすることによって、彼女の内臓の動きが制限され、ペニスが子宮をぶ撲つ衝撃が倍加されていた。

まるで鐘撞きのように震わされた子宮の波動は、ぷるぷるとキャロンの体を震わせながら下腹から乳房、乳房から脳天へと突き抜け、キャロンの心に残っていた魔王とのセックスへの嫌悪感を消し去っていった。

「ああっ！ ああっ！ きもち……いいっ！ はああああんっ！」

グジュツッ！ グジュツッ！ グジュツッ！

ラモー・ルーの力強い一突き／＼毎にキャロンの小さな体は石牢の壁に押しつけられる。同時にキャロンの乳房は壁に潰され、擦りつけられ、それがさらなる快感を生む。

「はああつ……いいの！……いいのお！」

キャロンの喘ぎ声と、ジュボジュボと魔王のペニスが膣を出入りする音が二重奏を奏でていた……

石壁に凭れ、両手両脚を放り出すように座り込んだキャロン。美しい金色のポニーテールは汗で体に張り付き、首筋、乳房、脇腹、下腹部、背中、尻、太もも、ふくらはぎ、其処此処に鮮やかなキスマークが残され、だらしなく開いた股根からは精液がトロトロと溢れ出していた。……そんな激しいセックスの痕とは対照的に彼女は満ち足りた微笑みを浮かべ、ラモー・ルーを見上げていた。

彼女の乱れたポニーテールを愛おしそうに指でかき上げながら眼を細めるラモー・ルー。

「フフフ、今宵は良い夜であった。……入るがよい」

石牢の扉が開き、事が終わるまでそこで控えていたのだろう、黒いローブ達が入ってきて

た。

一人はキャロンの手脚の枷を外し、もう一人は手に持った小さな木箱の蓋をあけ、恭しく主あるじに差し出した。中には金色こんじきの首飾チヨールカーり。ラモー・ルーが取り出すと、石牢の入り口から入ってくる灯りで首飾チヨールカーりの表面に複雑な影が浮かび、かなり凝こった造つくりの物であることが窺うかがえた。

「美しい体にはそれを引き立てるアクセサリーが必要だ、フフフフ」

ラモー・ルーはキャロンの顎あごに手を添え顔を上げさせると、首飾チヨールカーりをキャロンの首に巻く。

パチン……

留め金の鳴ったその小さな音が、快樂の海に意識を漂わすキャロンには何故か大きく聞こえていた。

不思議な鏡

ラモー・ルーに首飾テヨーカーりを授けられた翌朝、石牢の扉からは鍵が外され、身繕みづくろいするため
の手鏡、ブラシ、リップ等々の道具も差し入れられた。

石牢を自由に入出入り出来るようになったキャロンは、ラモー・ルー城を探検してみることにした。先ず輿こしに載せられ運ばれていった通路を辿たどってみる。しかし、すぐに頑丈な鉄の格子戸に行く手を阻まれた。それには鍵が掛けられ、彼女の力では開きそうにはなかった。諦あきらめて引き返し、石牢を通り過ぎると、少し行った所に、水場のある部屋があった。

「あはっ、ここなら沐浴できそう」

この城に囚われてからというものの、手桶の水とスポンジで体を拭うしか出来なかったキャロンはうれしくなった。

そこを後にし、そのまま奥へ進むと、突き当たりの左側に上へと続く螺旋階段らせんがあった。

どれくらい階段を登っただろうか。グルグルと目が回りそうになった時、キャロンの髪が空気の流れてそよぎ始めた。ほどなくして階段を上りきると、ラモー・ルー城からいく

つも突き出している尖塔のひとつ、その最上階にキャロンは立っていた。

「んー、久しぶりの外……ってやだ！ あたし裸！」

優しく肌を撫でていく風が、素裸のままにいる事をキャロンに気付かせた。

「やだ……あたし、裸でいるの何とも思わなくなっちゃってる」

不意にキャロンの足下から這い上がってきた夜の地の風が彼女の太股、尻、彼処、乳房を愛撫していき、最後に金色のポニーテールをぱつと宙に広げた。

「あはっ……どうしてかしら、裸がとつても気持ちいい……」

キャロンは体を大の字に開き、大きく深呼吸すると夜の地を一望した。

紺青の空に瞬く幾千の星と一直線に並ぶ四つのラルの月。眼下には荒涼とした大地が広がり、その向こうには瘴気立ちこめる毒沼、鬱蒼としたデイメルンの森、……そして遙か遠く霞んではいるが、明るく緑に輝く昼の地が見えた。

「変態になっちゃったあたし……もう帰れないかも……」

生まれ育った昼の地、ついこの間までいた昼の地。なのに今はすぐ遠くて別の世界のようにキャロンは感じていた。

尖塔から降りてきたキャロンは螺旋階段の向かい側に扉があるのを見つける。

扉は重いうえに、ギシギシと軋きしみ動きも悪かったが、なんとか開けることができた。入ってみるとそこそこの広さはあるものの、中はがらんとしており、ただ古ぼけた大きな鏡が壁にかけられているだけだった。

キャロンが鏡の前に立って両手を真っ直ぐ上げても、鏡の上端は彼女の指先よりずっと上にあつた。

「大きいー！」

金属製の額縁には複雑な紋様が彫られていたが錆びに覆われ消えかけていた。

キャロンは爪の先で錆をカリカリと引っ搔く。その紋様は古代ラルの文字だったが、彼女に読めるはずもなく……。

全身を映せるような大鏡は王族や高官、大商人などが持つ事の出来る、身分や財力を象徴する物であり、小さな村で育ったキャロンにとって、これほど大きな鏡を見たのは生まれて初めてだった。物珍しさから鏡に自分を映して遊び始めるキャロン。

キャロンが鏡に近付くと鏡の中のキャロンもこちらに近付いてくる。後ろ歩きして、くるりと一回転、そしてまた近付く。鏡の中の自分にいろいろとポーズを取らせたりしているうち、キャロンは段々と大胆になっていき、自分の胸、背中やお尻のラインを確認し、「あたしって案外イケてるかも」と自画自賛してみたり、さらに乳房の形や、淡い陰毛、

恥丘を観察したり……。

乳房の先に張りを感じたキャロンが鏡を見ると、鏡の中のキャロンの乳首がピンと尖っていた。

「フフフ、美しい……」

不意にラモー・ルーの声が頭の中でリフレインする……。これまで、お転婆は止めなさい、もっと女の子らしくしなさい、と小言はもらっても、他人に容姿を褒められた事がほとんど無かった。キャロンはぺたんと床に座り、鏡の前でM字に脚を大きく開くと、両手でクレバスを押し広げた。

鏡の中の自分に向かって話しかけるキャロン。

「……あたしのここのって綺麗なんだって。お尻の穴もかわいいって、ふふっ」
 やっと褒められたと思ったら、よりにもよって彼処が綺麗だなんてと、少し可笑しくなった。

「あたし、ここを何度も犯されちゃったの……」

自分の花卉あそこをじっと見つめるうち、ラモー・ルーのペニスが何度も出入りする様が出されて、自然とキャロンの手は乳房を揉みしだき、ヴァギナに指を入れていた。

鏡の中の彼女も乳房を揉みしだき、ヴァギナに指を入れる。自分に自分が犯されているよう

な錯覚に陥るキャロン。

「はぁん……ああぁん……」

鏡に見せつけるようにくちゆくちゆと指を出し入れするキャロン。

「あたし、ラモー・ルーに、とつてもいやらしい娘こにされちゃったの……」

鏡の中のキャロンも向こうから見せつけてくる。

「ああぁんっ………ああぁんっ……」

鏡に自分の痴態を見せつけられ、さらに昂たかぶっていくキャロン。

「実はね……あたしね……こんな体にされたの嬉しいと思ってるの……」

勃起したクリトリスを指先でこね回す。

「あんっ……だつてエッチすると、とつても気持ち良くなれるんだもん……」

床に寝そべり、指を深く挿入できるように腰を浮かせるキャロン。

「特にここ……あはぁんっ！」

奥深く挿れた指先で子宮口をクツ、クツとお圧す。

「ここを……あんっ……乱暴に叩かれるのあたし大好き……あぁっ、はっあぁんっ！」

彼女の指は一番気持ち良くなれるスポットを熟知しており、巧みな動きでキャロンを絶

頂たまに導みちいでいく……。

「あああああああっ！」

軽く果てたキャロンはそのまま大の字に寝そべった。

「はあはあ……ああ……はあ……はあ……」

床の冷たさが火照った体には気持ち良かった。

「ん……？」

ここでも自分を見つめる何者かの気配があることを感じたキャロン。

「やだもう、ここが見たいの？ 誰かさん」

無邪気な笑顔でキャロンは、愛液に濡れそぼった桜色の花卉ラビアがよく見えるよう脚を大きく拡げてみせた。

「身も心も牝へと堕ちたと思ったが、まだそんな顔を見せるか……」

物見の鏡に映るキャロンを寝台の上に横たわったラモー・ルーが見ていた。

「ああっ！……はああん……んんっ！」

ラモー・ルーの腹の上ではサラが艶なまめかしく腰をくねらせていた。

それに重なるように鏡の中のキャロンが四つん這いになって腰をくねらせ始めた……が、その動きはギクシヤクとしていて、難しそうな顔で鏡で自分の動きをチェックしてい

た。

「何をしている？ ……なるほど後背位の練習か、ウハハハ！ まこと面白い娘よ」
パンツ！ パンツ！

上機嫌でサラの尻を叩くラモー・ルー

「ひっああっ！ あああっ！」

「キャロンめ、心を保ったまま牝に堕ちた体を乗りこなしておるのか、フハハハ！」
ラモー・ルーは燥ぐようにサラを激しく宙へと突き上げる。

「ひっああっ！ んっ、ああっ！ はあああっ！」

暴れるペニスから振り落とされないよう、ラモー・ルーの腕にしがみつくサラ。

「……しかし、油断は禁物よ。いつ己の淫欲に呑み込まれ、心を壊すとも限らん。鏡使
いよ、今後もキャロンの観察を続け、わしに逐一報告するのだ、分かったな」

「御意……」

そう返事をした鏡使いはラモー・ルーの方を向いたまま……、その視線はサラに注ぎ続
けられていた。

「うーん……この角度だった？ いや、やっぱりこの角度？」

鏡を前に、四つん這いになったキャロンは腰を上げたり、下げたり。昨夜、後背位で犯されて、気持ち良かった腰の角度を覚えておこうと復習していた。

「クシュン！ ……あうう、ちよつと冷えてきたかも」

そろそろ帰ろうかと、キャロンが立ち上がると鏡に不思議な事が起きていた。

「……えっ？」

キャロンの動きと鏡の中のキャロンの動きがずれているのだ。

気のせいかと思ひ、試しに鏡に向かって手を振ってみると鏡の中のキャロンはちよつと遅れて手を振る。くるりとその場でターンをすると、鏡には自分の背中が見えている。

「な、なにこれ？ ……、この鏡も魔力がかけられているの？」

気味悪さを感じたキャロンはそくさとその部屋を後にした。

しかし、そんな事が起こった後もキャロンは大鏡のある部屋に出入りしていた。

相変わらず動きが遅れて映る気持ち悪い鏡だったが、顔だけで一杯になる手鏡を使うより、全身が映る大きな鏡の前で身繕いすることが気に入っていたからだ。

……素裸のキャロンには、髪をとかすのとリップを付けたりくらいしか、することはなかったけれども。

ラモー・ルーの夜 第三夜

キャロンがラモー・ルーの夜伽よとぎに毎晩呼ばれることはなくなっていた。代わりに彼女が性欲をどうしようもなく抑おさえきれなくなった頃合みはかいを見計みらったかのよううに迎えがやってくるようになっていた。

「今日は趣向を変えてみようとのラモー様の仰せです」

「やだ……どんなエッチな事するの？」

好奇心でキャロンの顔がパツと輝く。

「それは後のお楽しみです」

「なによ、けちい……」

「趣向を変える」という言葉に淫みだらな想像を膨おらませるキャロンを乗せた輿こしは、いつもの道順から外れ、細く暗い通路の入り口で止まった。

「ここからは歩いていただきます」

キャロンは輿こしから降りると、黒いローブ達の後を付ついて行く。

通路を奥へと進んでいくと程無くして下り階段が現れた。そこから先には灯りがまったくなく、まるで奈落の底へと続いているかのようだった。黒いローブ達はランタンを取り出し火を灯すと階段を降りていく。キャロンもそれに続く……。

「フフフ、待っておったぞ」

ラモー・ルーがキャロンを招き入れたその部屋には、人の背丈ほどもある大きな壺がいくつも置かれていた。

黒いローブ達はどこからか大きな浴槽を運んでくると壺の前に置いた。次に壺の横にある取っ手を操作すると、壺の口が浴槽へと倒れ、中から黒いドロドロとした液体が注ぎ込まれていった。

キャロンが浴槽を覗き込むと、その中にはコイルタールのようなドロツとした物が入っていて、よく見ると、それはウゾウゾと蠢うごめいていた。

「きやつ……」

気味の悪さにキャロンは後退あとしきりする……が、すぐに背中がラモー・ルーにぶつかった。

「牝おんなの体を舐め回すためだけに生きている魔物だ」

ラモー・ルーはキャロンを後から抱きすくめると、彼女の体を撫で回かしながら囁ささく。

「それに身を委ねれば、いつもとは違った快感を与えてくれるぞ。……なに心配するでない、その力は赤ん坊ほどしかない。嫌ならすぐにやめれば良いのだ、フッフ」

「いつもと違った快感……キャロンは躊躇いながらも、コクリと頷いた。

「では失礼します」

黒いローブがキャロンのみぞおちに触れるとそこには緑の紋様が付けられる。キャロンは立ったまま動けなくなった。

「な、なにをするの？」

「お楽しみ頂く前の処置でございます」

ポニーテールを纏めてまといる髪留めが外され、ふわっとキャロンの金髪が広がる。黒いローブはキャロンの髪をブラシでとかしながら、霧吹きで丁寧にミストを吹きかけていく。それが終わると、次にキャロンの顔にも入念に吹きかけていく。一連の処置を終わらせ、キャロンの金髪を再びポニーテールに纏めると、黒いローブは彼女に印した緑の紋様を消す。硬直していたキャロンの体がスッと弛緩するのが傍目からも見て取れた。

「どうぞ」

黒いローブが促すが、浴槽の中を見つめたまま動かないキャロン。やはり得体の知れぬ魔物に体を委ねる事には尻込みしてしまう。

それを見て取ったラモー・ルーは再びキャロンの背後に立つと、後から両腕を回し、^{てのひら}掌で彼女の太もも、下腹、乳房へと流れるように撫で上げる。

「あああ……」

「なにも怖れることはないのだ、さあ……」

ラモー・ルーはキャロンの乳房を^{てのひら}掌で回すように揉みながら、最後に両の乳首をきゅつと強くつまむ。

「……ああんっ！」

それがキャロンを動かす為のスイッチだったかのように、彼女の体はピクッと震えると浴槽へと進み、その身を浸した。

ゾゾゾゾッ！

浴槽に足を入れるや否や魔物はキャロンに吸い付き、体を這い上がってくる。

「やあああっ！」

恐怖に駆られたキャロンは悲鳴をあげながら、必死にまとわりついた魔物を体から引き剥がす。しかし、剥がしてもくく、魔物はまた張り付いてくる。そして何度も^{つか}掴んでいるうちに、手の中でウゾウゾと蠢いている魔物にはほとんど力が無い事に気付くキャロン。

「そうよ、いざとなったらやめればいいのよ」その安心感で恐怖で^{しま}萎んでいた淫欲が再

び膨らみ始め、キャロンは浴槽の真ん中に立った。

許しを得た魔物はキャロンの太ももから体へと這い上がっていき、見る見るうちにキャロンの首から下を黒いゼリー状の体で覆っていった。

魔物はキャロンの全身を覆い尽くすと彼女の性感帯を同時に刺激し始める。

「んっ、ああ、はあああ……」

魔物が生み出す快感に立っていられなくなったキャロンは浴槽に身を沈める。やがて、白い二本の足が魔物の表面からにゅっと突き出されると浴槽の縁にかけられた。

「あああああああつ！ ……あああああつ」

浴槽を満たす魔物に隠され外からは見えなかったが、キャロンのM字開脚で無防備になった腔ツアギナに、魔物が殺到していた。肉襲にくひだに吸い付かれ啄ついはまれる新しい快感に打ち震えるキャロン。

「ああん！ あああん！」

浴槽の縁ふちにかけて脚に力が入り、キャロンは頭をいやいやと振る。

「だめええ、そこは、っは、……あああああつ！」

魔物は彼女の尻穴アナナルからも容赦なく侵入し、奥へと進みながら中に残っていた排泄物を舐め取っていく。

「あああああつ！ ……はああああん……」

睽ツアギナと尻穴アナナルを占拠する魔物がドクドクと脈動する圧迫感と、女陰に張り付かれ尿道口をこちょこちょと愛撫される気持ち良さでキャロンは失禁していた。魔物は獲物から溢あふれ出す小水を一滴も漏らさず、ジュルジュルと吸い尽くしていく。

「あああつ、ああん！ きもち、いいい……きもちいいよお、ああんっ！」

全身を包む快感に蕩とろけきつた表情を浮かべたキャロン。

だらしなく開かれた口からは涎よだれが滴したたり始めていた。

「……むっ、すぐに止めよ！」

ラモー・ルーの荒らげた声に、黒いローブは慌てて浴槽の魔物に何やら杖のような物を突き刺す。すると魔物はギュッと縮ちぢこまるように動きを止めた。

黒いローブ達がキャロンを浴槽から引き上げた。魔物の性感マッサージから解放されたものの、未だキャロンの体には快感が駆け巡り、足下がフラフラしていた。

ラモー・ルーはキャロンの背中に手を回し、体を支えてやる。そして、彼女の体をゆっくりと撫でる。

「あああ、……ああん……はああん……」

キャロンは全身が性感帯になっているかのようなだった。魔王に触ふれられる場所全てに電

流のように快感が走り、その度に体がぴくっぴくっとなんと震えてしまう。

ラモー・ルーが黒いローブに合図をすると、キャロンの前に大きな鏡が置かれた。

「おまえにこれはまだ早かったようだが……それ、体は綺麗になっておるぞ」

鏡を見ると、キャロンの肌は赤ん坊のようにつるんとして、無駄毛も綺麗になくなっていた。そして、陰毛も……

「いやあん……彼処も無くなっちゃってるう……」

「その魔物は捌め捕った獲物の毛や老廃物、排泄物を食って生きている生物の遺伝子を組み込まれたモノで、先程のミストは必要な毛髪は保護しておく為であり……」

「もうよい……」

ラモー・ルーは手をかざし、黒いローブの説明を遮る。

最近やっと生え揃ってきて大人っぽくなったと喜んでいたのに、また子供に逆戻りになり、凹んでいるキャロンは黒いローブの説明など聞いていなかった。

「今日はわしが送り届けてやろう」

キャロンを抱き上げるラモー・ルー。

空中に浮かぶラモー・ルー城には黒騎兵のフライングマシンが行き来する出入口が何か

所か設けられていた。しかし、そことは別の、城の最下層部近くにある開口部から一機のフライングマシンが滑り出してくる。

ラモー・ルーとキャロンを乗せたフライングマシンが夜の地シヤドルの空に舞い上がる。

キャロンは魔王の膝を跨またぐように座り、マシユマロのような下の唇がラモー・ルーのペニスを頬張っていた。

一直線に並ぶラルの四つの月をフライングマシンの影が横切っていく。

「もうすぐあれが一つに重なる……」

ラルの月を見上げ、眩くラモー・ルー。……ふとキャロンに目をやると、

「ああん……、はああん……気持ちいい……」

空を飛ぶ風で火照りすぎた体を冷ます気持ちよさと、ラモー・ルーのペニスが子宮を押し上げてくる気持ちよさで、キャロンはうっとりとした表情を浮かべていた。

「フツ……しばらく空の散歩を楽しむか」

ラモー・ルーは操縦桿を巧みに操作し、急上昇、急降下を繰り返す。

「落ちたくなければ、股にしっかり力を入れていろ、フフフ」

キャロンの体が一瞬浮かび上がって、落ちてくる所を待ち構えていたペニスが突き上げる。

「あああああん！ あああっ、あああああっ！」
 止め処なく溢れ出すキャロンの愛液を月の光が銀色に煌めかしていた。

ラモー・ルーはフライングマシンを城の上空で大きく旋回させながら視線を巡らし、目標を見つけると、そこへ機首をまっすぐに向ける。二人の乗ったフライングマシンが尖塔の最上階へと着陸した。そこはキャロンの石牢へと繋がっている尖塔だった。

ラモー・ルーはフライングマシンからキャロンを降ろすと背後から彼女の太ももを掴み、M字に開脚した体勢で抱きかかえる。

落ちないようにラモー・ルーの腕に手を回すキャロン。膝下を見るとペニスが見ると、彼女の尻を擦りつけながら遅くそそり立っていた。

キャロンがクスツと笑う。

「何が可笑しい？」

「ほらこれ。あたしに立派なおちんちんが生えたみたい、あはっ」
 屈託のない笑顔を見せながら、キャロンは陰唇でペニスを揺らす。

「まったく……どれほど淫欲に浸しても、お前はそうやって笑う。不思議な娘だ」
 ラモー・ルーはそう言うと、ペニスを肉吊りフックのように使いキャロンの肉壺を刺し

貫いた。

ズヌッ！

「あああっ……ああああんっ！」

ペニスに子宮と共に内臓を持ち上げられ、串刺しにされた瞬間、先まで無邪気に笑っていた少女の顔は牝の顔に変わっていた……。

ひとつの生き物になったかのような二人が階段を降りていく。魔王が一步／＼階段を降りていく度、ゆっさゆっさと上下するキャロンの腔なかでは固く強張こわばったラモー・ルーのペニスが彼女の子宮ポルチオ口に頭突きを食らわせていた。

「あっあん……ああん……ああん……ああん……」

ラモー・ルーはキャロンを抱えたまま、あの不思議な大鏡のある部屋に入っていく。

「どれ、こうすれば、おまえとわしが繋がっているのがよく見えるだろう」

大鏡の前に立ったラモー・ルーは掴んでいるキャロンの太股を大きく拵こげ、結合部分を彼女によく見えるようにした。

「ああ……、いやあ……」

キャロンの体を上下させながら自らも腰を動かし、深いピストン運動を始めるラモー・ルー。

「あああっ、いやっ！ あああああん！ あああああああっ！」
 子宮を突き破られそうな衝撃が痛いほどの快感を与え、ラモー・ルーの腕にしがみつ
 きながら顔を激しく左右に振るキャロン。

「ああああん！ んっあああっ！ はあああっ！」

「自分が犯されている姿はどうだ？」

とろんとした瞳で鏡の中の自分を見つめるキャロン。

(ああ……、あたしって犯されてる時、こんなエッチな顔してるの？)

鏡の中のキャロンはうっとりとした表情を浮かべていた。

(ああ……あんな太いのがあたしの胎内おなかに入ってる……)

鏡の中のキャロンの彼処あそこは愛液を垂らしながらペニスを啜くわえこんでいた。

(ああ……、あたし、すごく気持ちよさそう……)

鏡の中のキャロンはラモー・ルーに身を委ね、エクスタシーにとっぷりと浸つかっていた。
 激しく突き上げるペニスがプルプルと乳房を弾ませ、ポニーテールを踊らせる。

(……うん？ 動きが)

キャロンは大鏡がいつもと違って、映している物の動きが遅れていない事に気付いた。
 ……が、それも一瞬の事、下腹部から脳天に突き抜ける快感が彼女の思考を止める。

「……っ！ ああんっ！ ああんっ！ あああんっ！」
そして、次々と押し寄せてくる強烈な快感の衝撃がキャロンの鏡への興味を消し去っていった。

抱きかかえてきたキャロンを石牢のベッドに寝かせるラモー・ルー。

夢見心地な瞳で魔王を見上げるキャロンは自然と脚を広げた。

それに応えるようにラモー・ルーがヴァギナ陰を愛撫すると、指を伝ってトプトブと精液が溢れ出してきた。

「やん……こんなにたくさん……」

はにかむように微笑むキャロン。

「次も楽しみにしているぞキャロン、フフフ……」

キャロンの耳元で囁くと、石牢を去って行くラモー・ルー。

ラモー・ルーの夜 第四夜

ラモー・ルー城の周りにはいくつもの岩塊が浮かんでいる。その中にただ一つ、美しい逆円錐形をした岩……否、それは明らかに人の手によって造られた構造物があった。側面には底から上に至る階段があり、それは幾何学的な紋様にも見え、鏡の様に平らな頂上には祭壇を中心にストーンサークルが配置されていた。

おどろ／＼しいラモー・ルー城とは違い、神聖な雰囲気を感じさせる光景にキャロンはキヨロキヨロと周りを見渡していた。

「ゴモロスの神殿にあった空中祭壇だ。この城までわしが移動させた。ここに女神の力が眠っていると伝えられていたからな……」

キャロンとラモー・ルーを囲むストーンサークルが月光を反射して、キラキラと銀色に輝いていた。

「ふうん、綺麗……きゃあっ！」

ラモー・ルーはキャロンを抱き上げ祭壇の上に押し倒すと、ダラダラと唾液を垂らしな

がら、少女のしなやかな体に舌を這わしていく。

「いやあん……外でなんて……」

その言葉とは裏腹に、キャロンはラモー・ルーにその身を捧げるように足を大きく広げ、
花弁はなびらを晒さらしていた。

「ここではラルの月しか見ておらぬぞ。フフフフ」

キャロンの瞳に映っていたラルの月をラモー・ルーの顔が隠すと、彼女の唇をこじ開け
魔王の舌が侵入してきた。キャロンも舌を絡ませディープキスにすかさず応じた。

「はああ……、んっむう……んっ」

ラモー・ルーの唾液がキャロンの舌を通じてトロトロと彼女の喉に流し込まれていく。

少女の舌を味わいながら、ラモー・ルーはキャロンの乳房を下から絞りあげるようにも
みしだき、乳首を摘つままんぞりこりと虐いぢめる。

「あああつ、あん、ああんっ！」

ラモー・ルーはキャロンの太ももを押し広げると、今度はぼってりした下の唇へディー
プキス。

キャロンの開かれた脚の向こうに見えるラモー・ルーの体がムクムクと波打ち始め、巨
大な蜘蛛の魔物へと変形していく。彼女の初めてを無理矢理奪った魔獣がそこにいた。し

かし、今のキャロンにとっては目眩めくるめく快樂の世界に連れて行ってくれる案内人だった。

「あん……」

祭壇に捧げられた生贄を食らおうとするかのように、魔獣の蜘蛛のような脚が、キャロンの四肢を祭壇に押さえ付け動けないようにした。次に魔獣の口から何本もの細い舌が這い込めてくると、キャロンの口、耳、首筋、乳房、脇、臍、下腹部、陰部、内股、あらゆる性感帯を舐め回していった。

「あっああんっ、はああああん、もっど……ああん」

そして、一番太い舌の吸盤状になった舌先が肌に強く吸い付き、いくつものキスマークをスタンプのようにキャロンの体に残していく。

魔獣の下腹部からヌルとペニスが顔を出すと、蛇の様な動きでキャロンの花卉はなびらを亀頭でクチュクチュとくすぐる。

「あああん……」

待ちかねていたモノの登場にキャロンの瞳は淫らに輝き、艶めなまかしく腰をくねらせ、ペニスを胎内ななかへと誘った。

しかし、ペニスは花卉はなびらから離れると焦らすように下腹や内股を這い回る。

「ああんっ、いやああん」

充血したクリトリスを下から潰すように亀頭を擦りつけられ、キャロンの蜜壺がヒクヒクとその口から愛液を滴したらせる。

「はああんっ、意地悪しないでえ……ちようだい……はやくう……」

その言葉を待っていたかのように魔獣のペニスにキャロンの肉壺へと入っていく。

「あっあああああっ！」

魔獣の生殖器は人のそれとは違い、歪いびつに節ふし搏く立たっており、何段もの雁首にくひだで肉襲にくをひつかくようにキャロンの陰ヴァギナを犯す。

「あああんっ！ はあああああん！ っあああああん！」

新しい快感がキャロンを即座に上り詰めさせる。

「っ、あああああっ！」

キャロンが最初の絶頂を迎えると、魔獣はペニスを引き抜き、精液で彼女の下腹部、腹、胸を白く彩っていく。

「あああん、あ、あつい……はああ……」

精液がパタパタと体に降りかかる度、ピクン、ピクンと体を震わすキャロン。

「はあ、はあ……あああ」

キャロンは指で下腹部から腹、胸へと丁寧に精液を塗り広げ、最後に指に絡まった精液

を薔薇色の舌で舐め取っていく。陶醉した表情でラモー・ルーを見つめながら、キャロンはころりと体を回し、うつ伏せになると膝をつき空に向かって尻を突き出した体勢になった。

魔獣はキャロンの背中に覆い被さると、サソリが獲物に毒液を注入するかのようになす。少女を刺し貫く。

「はうっ、……ああっ、ああっ、ああっ！」

後から突かれる衝撃を子宮が快感の波動に変え、キャロンの体を突き抜けていく。ペニスがジュボジュボと出し入れされる度、結合部からはポタポタと愛液が滴り落ち、祭壇を濡らしていく。

「かけて……今度はあたしのお腹の中に……かけてえ」
甘い声で懇願するキャロン。

ビュッ、ビュルッ、ビュルッ、
「っはああっ、あああああっ」

精液が子宮口ポルチオに浴びせられた事が引鉄となり、膣ヴァギナがペニスをギュウギュウと圧迫する。
「もっと……お腹一杯にして！ あああああんっ！」

それに応えるように子宮をリズムカルにノックしながら魔獣は精液を吐き出し続けた。

「はああああ……んっ、ああああああ」

射精を終えた魔獣はキャロンを抱きかかえノソノソと祭壇の上に登ると、彼女を腹の上に載せた。

キャロンは体を起こし、魔獣の腹部で勃起しているペニスに唇を這わせキスをすると、亀頭を頬張り、フェラチオを始める。

「んっ、ふぐっ、んんっ……」

キャロンは魔獣の顔の方に尻を向け、腰を振り、クンニリングスを要求する。

ジュルルッ、魔獣の口から這い出した無数の舌が代わる／＼キャロンのヴァギナとアナルをしゃぶっていく。

「んっ、ふううん、くっあふん……」

キャロンが「もっと強く！」と催促するように尻をグイと突き出すと、魔獣の舌の群れが彼女のGスポットに集中攻撃を浴びせる。

「んんっ！ んぐうううっ！ んああんっ！」

キャロンが激しい舌の動きに堪らず噴いた潮を顔に浴びせかけられた魔獣は、彼女の聖水を美味そうに舐め取っていく。

魔獣は返礼とばかりにキャロンの喉に精液を吐き出す。

「んあっ！ ……ぐふっ ……んん ……んぐ ……」

キャロンは嘔き出す精液を喉の奥で受け止め、飲み干していく。

「はあはあ ……ああ ……」

ペニスに残っている精液も吸い尽くしたキャロンは体の向きを変えると、まだ天に向かってそそり立つ魔獣のペニスの上に跨またがった。

亀頭の位置を確かめるように花卉ラベアを擦りつけ、ペニスが自分の膣なかに入っていく様を見つめながら、ゆっくりと腰を落としていく。

「はあっ ……あああっんっ！」

亀頭が天井に達するのを感じると、キャロンは体をゆっくりと上下させる。

魔ラモール獣は牀の上に乗ったキャロンの好きなようにさせ、その痴態を眺めていた。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ あんっ！」

汗と精液で金髪が体に張り付き、体に付けられた無数の紅い性痕ステイグマ、一心不乱に腰を振るキャロンの裸体はラルの月の光を浴び、美しく妖艶な輝きを纏まとう。

やがて体を支えるため魔獣の足を掴んでいるキャロンの手にぐっと力が入り、彼女の腹筋がビクッビクッと収縮を始める。彼女のくたくタイミングを見計らい、魔ラモール獣は射精を始めてやる。熱い噴流ポルチオが子宮口を焦がし、キャロンを四度目の絶頂に導いていく。

「あああん！ あつい……ああああああっ！」

射精の脈動にシンクロするようにキャロンはビクッビクッと体を後に反らせ、その度に金色のポニーテールが大きく波打つ。彼女は内股で魔獣の体を挟み、腹筋と尻の筋肉を使い根元まで咥えこんだペニスをキュッ、キュッと締め上げ精液を搾り取っていた。

キャロンの心地よい肉壺の感触と彼女のイキ顔に眼を細める魔獣。

「鏡の前で体位の練習をしていた甲斐があったな、フッフ」

「……えっ、なんで知ってるの？」

快感に打ち震えていたキャロンの顔が少女へと戻る。

「わしはお前の事は何でも知ってるのだ、フッフ……」

「ラモー様ったらもう……でもあたしのココ、気持ち良いでしょ？」

魔獣の顔を覗き込んだキャロンは小悪魔のような微笑みを見せた。

「そういう台詞は百万年早い……」

魔獣は伸縮自在のペニスを上下運動させ、子宮諸共キャロンの体を突き上げた。

「あひっ！ ダメえ！ おなか……お腹壊れちゃうう！ ああああんっ！」

まるで暴れ馬に乗っているかのようにキャロンの体は魔獣の腹の上で跳ねていた。

城への帰途、デイメルンの森からフライングマシンの編隊が近づいてくるのを見つけたラモー・ルーは、その一団へと機首を向ける。

段々と近づいてくる四騎編隊の先頭のフライングマシンには黒騎兵とは違う鎧を着た兵士が乗っているのが見えた。

「やはり、あの隊が帰ってきたか……」

ラモー・ルーは四騎編隊の手前でクルリと旋回し、並列飛行させる。

「おお、これはく／＼ラモー・ルー様」

先頭の兵士が兜を脱ぎ、敬礼する。昼ヒユの地ツの人々誰もが尊敬の念を抱くラル王家衛士の鎧を着たその兵士はマリオだった。

馬鹿丁寧な敬礼をするマリオの視線はラモー・ルーの腕に抱かれた虚ろな目をした少女に注がれていた。彼女の肌には無数の朱い痣、女陰からは精液を滴らせていた。

（犯された後の女の姿もたまらんねえ……）

マリオは思わず舌なめずりをしてしまう。

「へへッ、お楽しみのお帰りで？」

マリオの問いには答えず、逆にマリオに聞くラモー・ルー。

「首尾はどうだった？」

「もちろん上々、ユリア王女救出隊はダイメルの森に迷い込ませて全滅でさあ
おどけるように両掌りょうてを上に向け「みんなおじゃん」とポーズを取るマリオ。

「そうか大義であつた」

「有り難きお言葉……」

マリオはフライングマシンのシートの上に立つと深々と一礼する。

城に向け飛び去ろうとするラモー・ルーに、頭を下げたままのマリオが尋ねる。

「……で、ラモー様、今回の褒美のほうは」

「褒美なら十分に足りておろう？ 我が黒騎兵を使い女を掠さらっては楽しんでおると聞いておるぞ、ハハハ」

ラモー・ルーは振り向くことなく城へと去って行く。

「……チッ」

マリオは小さく舌打ちする。

マリオ

ラモー・ルー城の駐機区画、黒騎兵達がフライングマシンの乗り降りで行き交う中、一人、昼^{ミユウ}の地の鎧を着た兵士がフライングマシンに乗り込む。その兵士が乗った機体はふわりと浮き上がるとフライングマシン専用の門を抜け、空へと飛び立っていく。

「くそっ、ドロスの野郎め！ 偉そうに。ここは人使いが荒いぜ。オレ様を誰だと思つてやがる。ラモー・ルーを封印から解いてやったのはこのオレ様だぞ！」

ユリア王女救出隊をまんまと全滅へと追いやったマリオだったが、今再びラモー軍団のスパイとして昼^{ミユウ}の地での任務を言い渡されていた。

愚痴／＼と言いつつながら、昼^{ミユウ}の地の方向へと操縦桿を倒したマリオは尖塔の上に白くて、時々キラキラと輝いているものに気付く。

「……なんだあ？」

ラモー・ルー城、いや夜^{シヤドル}の地でもまず見ない色彩を不思議に思ったマリオはポケットから望遠鏡を取り出し覗く。

「へえ、これはこれは……」

レンズの向こうには素裸の少女がいた。足下から舐めるように視姦を始めるマリオ。気持ち太めだが引き締まった脚。

「少しばかり太いし、へへっ短足だな。どこかの村から掠われてきた娘かあ？」
マリオは少女の背後に回る。

「ほう、良い尻してるじゃねえか。突っ込んでやりながらパンパン！ と、しばきたくなる尻だ……おっと」

少女の死角から出ないようにフライングマシンを操縦するマリオ。再び、少女の前側へと移動すると、陰毛がなく、無防備に晒されたむちっとしたクレバスが見えた。

「へっへっへ、ツルツとしたパイパンに、形の良いまんこ、良いねえ」

股間がカチカチになってくるのを感じながら、マリオが望遠鏡を少女の胸に向けると、小振りだが桜色の乳首がツンを上を向いた乳房がレンズの中にあった。

「ここは年相応だな……いや、小せえちいか？ さて、最後にお顔を拝見っと」
レンズが映した少女の顔にマリオは見覚えがあった。

「……ククッ、あん時のラモー・ルーのお気に入りか」

マリオは舌なめずりをすると、腰のポーチから吹き矢を取り出す。それはラモー・ルー

の命により、時には自分自身の欲望の為に、昼ヒユの地ウで女を掠さらう時に使っている馴染みの道具だった。

気付かれないよう、慎重にフライングマシンを少女の背後に回り込ませると、マリオは吹き矢を放つ。

「……？」

少女は吹き矢が当たった背中を確認しようとするが、すぐにその場にパタリと倒れ込む。「ひやはは、素っ裸だから当て放題だ」

マリオは誰にも見られぬよう周囲を確認しながら尖塔にフライングマシンを乗り付けた。

床に広がった金髪のパニーテール、滑らかで透き通るような肌、まだ幼さが残るが均整の取れたプロポーション。それらを月明かりが神秘的に輝かせ、マリオは思わず見とれてしまっていた。

「ほう……、なるほどねえ」

人攫ひとさらいに手慣れたマリオ、少女を素早くフライングマシンに載せると、城から幾つも突き出した尖塔が作り出す死角を利用しながら人目につかぬよう、ディメルンの森へと飛んで行く。

低空飛行で森の木々の隙間をすり抜け、ラモー・ルー城と大渓谷の中間点辺りまで来ると、マリオはフライングマシンを森の中に着陸させた。そして、その辺りにある木の枝や、草を機体に被せ、入念に機体をカモフラージュする。

少女を肩に担ぎ、鬱蒼とした森の中を歩いて行くマリオ。やがて視界が開けると、そこにはぽつんと丸太小屋が建っていた。数年前までは密猟者達が休憩所としていた小屋だったが、今は放棄されたものだった。

キャロンが意識を取り戻すと、見知らぬ小屋の中でベッドの上に縛り付けられていた。

「叫んでも他には誰もいないぜ？　ここはディメルンの森の真ん中だ」

知らない男がキャロンの顔を覗き込んできた。

「はっ、放して！」

「若い娘さんがそんな格好で歩き回ってるんだ、男が欲しくてたままないだろう？」
ニヤニヤといやらしい笑いを浮かべた男のねっとりとした視線がキャロンの忘れていた羞恥心を蘇らせる。

「……い、いやあ……見ないで……」

男はキャロンに武者振り付くと彼女の首筋から耳そして唇へと舌を這わせる。

「いやっ、いやっ！」

キャロンは顔を激しく左右に振り、男の接吻を拒絶した。

「まあいい、舌を噛み切られてもかなわんからな」

男は気を取り直すと、乳房をなで回し、乳首を舐め、軽く歯で噛む。

「……ひっ、痛っ！」

男はキャロンの体のラインに沿って舌を秘裂へと這わせていくと、無遠慮にクレバスを指で押し広げ、花卉はなびらを舐め上げる。

「へへっ、ここはいい味がするな、ラモー・ルーのお気に入りだけのことはある」

ひとしきりキャロンの味を舌で堪能した男が服を脱ぎ全裸になると、すでに彼のペニスは少女を犯そうと固くいきり立っていた。

「きゃっ！」

初めて人間の男のペニスを見るキャロンが目を背ける。

「おいおい、かまとどぶるんじゃねえよ、ここはもうラモー・ルーに良い具合にされてんだろう？」

男はキャロンの顎あごを掴み顔を向けさせ、片方の手では彼女の膣ヴァギナをいじる。キャロンはぎゅっと目をつむり、また顔を背ける。

「まあいい、……初々しいのも悪くないか、へへッ」
 下卑た笑いをしながら男はキャロンに覆い被さると指をツアギナに差し込む。今まで経験したことのない乱暴な指使いにキャロンは悲鳴をあげる。

「ううつ、……ひっ、……いやっ！」

「どうなってんだ？生娘みたいな反応しやがって」

男は両手でキャロンのひざのあたりを掴み、ぐいと脚を押し広げると、亀頭を彼女のはなびら花弁にあてがい狙いを定める。

キャロンの視界に男の体が迫ってくる。

「い、いやあああ！」

逃げようと暴れるキャロンの手首にロープが食い込み、赤い痣あざを作っていく。

「すぐによがらせてやる」

まだ受け入れの準備が出来ていないキャロンに男はペニスを無造作に突っ込む。

「くっ……い、痛っ！ 痛いっ！ あああっ！」

前戯と同じで男の竿使いも乱暴者そのものだった。見知らぬ男に犯される恐怖と体の中を乱暴に掻き回される苦痛に涙を流すキャロン。

「いやあ、ああっ、ひっ、あああっ、」

「つまんねえな、こんなのにラモー・ルーは夢中なのか？」

ただ射精の欲求を満たす為だけに男のピストン運動が激しくなっていく。

「あっ！ ……かっ……ひあっ、くあああっ！」

「へっ、そろそろイクぜ？」

男の腰がパンパンとキャロンに打ちつけられるリズムが速くなる。

「いやあっ、だめっ！ 中はいやああ！」

「つれない事言うなよ、そらっ、出すぜえ！ ……うほっ！ うほっ！」

男はキャロンの膣なごに盛大に射精する。

「いやああ……」

突然、ボタン！ と小屋の入口の扉が開け放たれる。

「！」

男は立てかけてあった剣を素早く取り、構える……が、すぐに戦闘態勢を解いた。

「……………ドロス」

ドカドカと巨大な体を揺すり、異形の鎧の騎士が小屋に入ってくる。

「マリオ、ラモー・ルー様がお呼びだ」

「へへへ……」

男は剣を床に放り投げると、観念したように両手を挙げた。

玉座に座るラモー・ルーと、その前に跪ひざまずいたマリオ。今、ラモー・ルー城の王の間にはその二人しかいなかった。

「マリオ、あのよう所で何をしておったのだ？ ドロスから昼ミユウの地チでの任務を命じられていたのではないのか？」

「昼ミユウの地チは遠いんでねえ、あそこでちよっと休憩してたんでさあ」
馬鹿にしたような口調で答えるマリオ。

「……わしの所有物モブツに手を出すとどうなるか、知らぬ訳ではあるまい」

「たまたま通りかかった俺をあんな娘が誘惑してきたんでさあ」

「……」

「欲求不満なのか素っ裸で彷徨うろつしてる娘だ、紳士としてはお相手をしない訳にはいきま
すまい？ へへへっ」

少しおどけた風に答えるマリオ。

「フツ、マリオよ、そんな戯あそれ言ことをいつまでわしに聞かせるつもりだ？」

「……これで終わりでさあ！」

そう言うなり、突然マリオは腰のフランベルジュを抜くとラモー・ルーに斬りかかった。フランベルジュがラモー・ルーの左肩から左胸を切り裂いていく。切り裂かれた場所がジュウジュウと焼け焦げていく。

「へへっ、七振りのリバースの剣のうちのひとつ、タダでは済まんذار？ それ、もう一丁！」

脇腹にたたき込まれたカットラスが魔王の胴の中央部で止まる。

「それ、三つ目え！」

眉間にクナイが刺さる

「ほらこれが最後だ」

モーニングスターがラモー・ルーの顔左半分を吹き飛ばす。

「流石はリバースの剣、あつという間に魔王様も瀕死の状態だ、クハハッ！」

ラモー・ルーの傷口がグズグズと崩壊していく。

「……………」

マリオが懐から手のひら大の鏡の破片を取り出すと、ラモー・ルーの目の前でヒラヒラと振る。

「これが何か解るだろう？ ブレイブの破片だ。こんな時のために取っておいたんだぜえ

へへッ」

「……………」

「魔力がまだ完全には戻ってはいないんだろう、ラモー・ルー。俺には解ってるんだ、なんせお前を封印から解いたのは俺なんだからな」

「……………」

「完全ではないおまえには四つのリバースの剣とブレイブで充分に脅威だろう、ああ？」

「……………」

「また封印されたくなければ、俺に従え。今日から俺がこの城の主になる。あるじ夜の地シヤドルの王は俺だぜえ！」

「出会った時から愚かなヤツだったが、これほどだったとはな……」

ラモー・ルーが右手の人差し指をふると、マリオの鏡を持った左手が見る見るうちに不自然な形に歪み始めた。

「な、なんだこれ！ うっうわああああああっ！」

バッシュッ！ 左腕が弾け飛び肉片と鮮血が飛び散る。

「ぎゃあああああああ！」

左腕を押さえ、うづくまるマリオ。が、次の瞬間、モーニングスターで渾身の一撃をラ

モー・ルーに放つ。

しかし、その攻撃をラモー・ルーは素手で軽く受け止めると、そのままマリオの得物を握り潰した。

「……なん……だと？」

目の前で粉々になっていくリバースの剣と、吹き飛ばしたはずのラモー・ルーの顔が元に戻っている事に啞然とするマリオ。

「リバースの剣は力を貯めておく器にすぎん。その力も十四年前にほとんど使い切っておる……わしを封印する為にな」

見るとラモー・ルーの傷口の崩壊は止まり、急速に再生を始めていた。

「ばかな、そんなこと……七大衛士ななだいゑしのじじい達、何も言っただぞ……」

声を震わせるマリオにラモー・ルーは額に刺さったクナイを引き抜き、自分の再生力を見せつける。

「伝説の剣と云われたリバースの剣も今や只のナマクラよ」

ラモー・ルーはマリオに近づきながら、胴と肩に刺さったリバースの剣を一本ずつ引き抜き、粉々に砕いていく

「う、うわあ！ 来るな！ 来るな！」

破壊されたモーニングスターを振り回しながら、後退あとじきりするマリオ。

「……もつとも、わしは元の力をすでに取り戻している」

ラモー・ルーがマリオに向かって腕を突き出し、掌てのひらをグツと握る。

「極上の蜜壺を二つ、手に入れたおかげでな」

マリオの体は捻ねじれ、関節という関節が逆方向に折れ曲がっていき、最後に全身の骨がバキバキと音を立てた。

「ぐぎゃあああああ！」

ラモー・ルーが握った手をパッと開くと、バンツという風船が割れるような音と共にマリオの体が四散し、そこには肉塊と血だまりが残されていた。

「もう少し賢かしこければ、今しばらく生きていられたものを……」

何かを探すように床に散らばった肉片を見回すラモー・ルー。やがて血の塊の中から芋蟲いもむしのような黒い塊が這い出してくるのを見つけると、それをつまみ上げる。

「これを植え付けた時から、おまえはわしの奴隷でしかなかったのだ、フッフ」

ラモー・ルーが黒い塊を左手の欠けた小指の辺りに押しつけるとそれはグチュグチュと音を立てて小指へと形を変えていった……。

「誰か！ ここを開けて！」

マリオはキャロンを羽交い締めはがじにするとベッドへと引きずっていく。

「いやっ、放して！ いやーっ！」

キャロンを天蓋付きのベッドの上に放り投げると、彼女の上のし掛かるマリオ。シーツをビリビリと引き裂くと、それを使ってキャロンの手足を天蓋の支柱に縛り付け、口には猿轡さるくわをはめた。

「んーっ！ んーっ！」

ベッドの上に大の字で縛り付けられたキャロンをニヤニヤと見下ろすマリオ。

キャロンの肌を撫で回し始めるが、恐怖にバタバタと暴れるキャロン。

マリオはやれやれと言った風にキャロンの頭にシーツをグルグルと巻き、目隠しをした。

「んーっ、……………」

不意に視界を奪われた恐怖でキャロンが体を硬直させ、しばしの沈黙が訪れた。

キャロンの抵抗が落ち着くの見計らったマリオがキャロンの体に触れる。

「んんんっ！」

キャロンがビクッと体を強張らせ手足を縛るシーツがキリキリと音を立てる。

マリオは掌てのひらでキャロンの体をマッサージするように撫で回す。

何も見えないキャロンは何をされるのか触覚に頼るしかなく、それが彼女の体を敏感にしていた。徐々にキャロンの手足から力が抜けていく。

マリオの手が乳房を回すように揉みしだいていく。そして、乳首を舌で転がす。愛撫に感じ始めたキャロンは乳首を勃起させていた。それを待っていたかのようにマリオが乳首を軽く嘯む。

「っんー！」

マリオのゴツゴツした指が肉厚な陰唇を押し広げ、隠れていた花卉はなびらを愛撫する。やがてキャロンの彼処は湿った淫らな音を奏で始めてしまっていた。マリオの舌が、乳首から臍へそ、下腹へと這はっていき、いやらしい音を立てている女陰へ達する。

「ンッー、ンッー」

尿道口を舌先で刺激し、クリトリスを甘嘯みし、時折、キャロンに聞こえるように女陰全体をブチュブチュと下品な音を立て吸う。

昂たかぶって苦しそうな息遣いをするキャロンの猿轡さるぐつわをマリオが外してやると、

「……っ、ああっああああん！」

途端にキャロンの甘い声が部屋に広がった。

マリオは指を膣ヴァギナにするりと忍び込まずと、キャロンの胎内ななかを熟知しているかのように

自在に動かし、キャロンのGスポットを緩急を付け攻め始める。

「ああっ、あああああん、ああああああっ！」

あつという間に絶頂に達したキャロンから、ピュッピュッと勢いよく潮が噴き出してベツドに染みを作っていく。

「はああああ……」

性欲に従順なキャロンは、イカされた事ですっかり大人しくなっていた。

キャロンの目隠しを取るマリオ。

目を開けたキャロンの前に男根を見せつけるかのようにマリオが立っていた。

(あんなの入らない……いや……だめ……)

天に向かってそそり立つペニスはみぞおち辺りまでであろうかという長さで、先に襲われた時とは明らかに違っていた。

マリオの性技の虜となり「あのペニスで犯される怖さ」と一方で「あのペニスで犯される期待」で頭が一杯になっていたキャロンはマリオのペニスの異常さに気付かなかった。

マリオはキャロンの脚を縛ってるシートを緩め、太ももを掴みM字に脚を開くと焦らすように亀頭を花弁に擦りつける。

「いやあ……だめえ……あああ……」

キャロンは嫌々と首を振るが、その瞳はマリオの巨根に釘付けになっていた。舌舐めずりするとキャロンの肉壺にペニスを埋めていくマリオ。

「ひっ、ああああっ！」

マリオの肉槍がキャロンの小さな膣ヴァギナに収まるはずがなく、すぐに奥にぶつかる。にも拘わらず、さらに奥へ／＼と子宮口ホルチオをこじ開け中へ入っていかうとするかのようにズンズンとピストン運動が始まる。

「ひいっっ！ あひいっ！ ああああっ！ くっああっ！」

子宮が受け止めている衝撃が内臓をブルブルと震わせ、ペニスが膣ヘソの辺りまで挿入されているように錯覚させた。

（いやっ、あたしのお腹、串刺しにされてる！）

思わず自分の下腹を確認したキャロンはマリオと目が合ってしまう。

「……っ！」

マリオの性技に屈し、今こうして体を重ねているものの、自分を強姦レイプした男の顔に嫌悪感を持たずに居られなかったキャロンはぷいっと顔を背けた。

マリオはキャロンのポニーテールを掴むと力尽くで自分の方に彼女の顔を向けさせる。

「わしを見ろ」

今度は目をぎゅつと瞑るキャロン。

「嫌われたものだな。あの男、よほど下手くそだったのか……」

マリオはキャロンに覆い被さると、しゃくるようにペニスを動かかし始めた。

先^{さつき}よりもさらに挿入の深度が増して、ペニス^{さつき}が腹を突き破ってしまいそうに感じたキ

ャロンは悲鳴を上げる。

「いやああっ！ あああっ！ 裂けちゃう……裂けちゃう！ ひぎいっ！」

ズン！ ズン！ ズン！

此の前の粗野な挿入とは違い、マリオは子宮を的確に打ち据え、激しく震えさせた。

ズン！ ズン！ ズン！

快感の波動がキャロンを包み、やがて叫び声は牡^{おす}を求める鳴き声へと変わっていった。

「ああんっ！ あああっ！ あああん！」

やがて男根のビクビクとした脈動に噴火の子兆を感じ取るキャロン。

「いやっ、中はダメえ！」

嫌っている男にまた中に出されるのは嫌だと、射精から逃れようとするキャロン。しか

し、彼女の両脚を掴^{つか}んでいるマリオはそれを許さない。

「いやあ、あああああ……はああああん」

精液の噴流が子宮へ浴びせられ、キャロンはオルガスムスを迎えてしまう。

子種を胎内はらに受け入れる、セックスの本質である生殖行為に悦びを感じるよう、ラモー・ルーに躑しつけられていたから……否、そうではなかった。

(嫌いよ、こいつ嫌い……なのに……もっと中に出して欲しいってあたし思ってる……この遅いおとこ牡おとこの精液が欲しいって思ってる……)

彼女は自分の体を支配した牡おとこに種を植え付けられる昂奮でイってしまった。

マリオは最後の一滴までもキャロンの膣内なかに吐き出そうとするようにグツグツと亀頭で子宮を小突き上げる。

「ああん……ああっん……あんっ、あはあああん……」

キャロンは精液を絞る取るかのように腰をくねらせていた……。

射精を終えたマリオはペニスを引き抜くと、キャロンの両手両脚の縛めを外し、彼女を自由にした。

キャロンの胸の辺りに跨またがると、彼女の眼前にビクツビクツと脈動するペニスを誇示するマリオ。

「悔しいけど、この牡おとこに牝おんなとしての自分はすっかり支配されてしまった」とキャロン

は自覚していた。しかし、マリオに強姦された事はどうしても許せずキャロンは顔をそらす。……そんな彼女の鼻をムワツとした牡おすの臭いが刺激した。

「……！」

キャロンは一瞬、ハツとした表情を見せたかと思うと、みるみると頬が朱に染まり、吸い寄せられるようにペニスに唇を這はわしていた。精液と愛液に濡れた亀頭、雁首かりくびを丁寧に舐め上げ、口を含む。

「んっ……んっ……はあ……んっ……」

キャロンの奉仕を満足げに見下ろすマリオ。そして、奉仕の褒美とばかりにキャロンの口の中に精液が放たれる。

「んっ……んんっ！……んく、……んく」

喉に注ぎ込まれる精液をこくこくと飲み干し、口から溢こぼれ出た雫も無駄にすまいと舐め取っていくキャロン。

「……きゅっ」

キャロンが口淫の余韻に浸る間も与えず、彼女を乱暴に四つん這いにさせるマリオ。次の行為を悟ったように腰を突き出し、マリオの眼前に腔口さくらを曝さらけ出すキャロン。腔ヴァアギナの息遣いに合わせ、先に注がれた精液がトロトロと吐き出されてくる。

パン！ パアンツ！

マリオがキャロンの尻を強く張った。

「ひぎっ！ きゃあああ！……あああはああん……」

強い刺激を求めてやまないキャロンの体は、尻を叩かれた痛みで軽くイってしまふ。

「そら、惚けてるのではないぞ。今度はおまえがわしを楽しませるのだ」

「はああ……はいい……」

マリオは朱色の手形が残った丸く形の良い尻を撫でながら亀頭、竿の背中を花卉はなびらに擦りつけ、滴り出てくる愛液と精液で濡らす。充分な下拵したごしらえをされたマリオの肉槍が再びキャロンを刺し貫く。

「……はうっ！ ああんっ！」

ズンズンと子宮を押され口から内臓が飛び出しそうな感覚がキャロンを襲う。

「つく、はあああん！」

マリオが律動的な腰使いで子宮を殴打し、そこを起点とした振動が快感のヴァイブレーションとなってキャロンの全身を駆け巡る。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ あんっ！」

更にマリオはキャロンの両腕を掴み、支えを失った彼女の上半身をうつ伏せでベッドに

押さえつける。それは斬首刑に処せられる罪人のような体位であった。だが今、処刑執行人の前に差し出されているのは首ではなく、キャロンの女性器。

身動き出来ない体勢にされたキャロンに肉槍の容赦ない串刺し刑が執行される。

「はんっ！ ひいんっ！ はんっ！ ひいんっ！」

拷問に近い性交……その激しさに相反するようにキャロンの体は徐々に脱力していき、マリオの肉槍に犯されるままになっていった。

肉壺を甦る事に夢中になっていたマリオはキャロンの変化に気付くのが遅れ、「しまった」という表情をすると、キャロンの顔を覗き込む。

耳まで紅潮し、呆けたような表情、悲鳴とも嬌声ともつかない叫び声を上げる口からは涎を垂らしていたキャロンは……愛しい人を見る眼差しでマリオを見つめ返してきた。

「……フツッ、おまえは本当に素晴らしい娘だ」

キャロンが牡の前にすつかり体を開いている事が解ると、マリオは遠慮無く猛り狂った肉槍を打ち付け続けた。

「はんっ！ はんっ！ はんっ！ はんっ！」

やがてキャロンのイク兆候を感じ取ったマリオはピストンを更に加速させていく。

「ああんっ！ はああああっ、ああああああーっ！」

歓喜の悲鳴を上げるキャロン。

オルガスムスと同時に滾るたぎような精液が注がれ、キャロンの体は痛いような快感を得てブルブルと痙攣けいれんしていた。

「ふーん、男の人ってこうなってるんだあ……」

ベッドに横たわったマリオの腰に抱きついたキャロンが、子供のように足を交互にパタパタと動かし、興味津々でペニスを観察していた。幾度ものセックスを経験してきたキャロンだったが、人間の男性器をじっくり見るのは初めてだった。

「うふっ、プニプニして気持ちいいー。」

キャロンは指で亀頭を弄び一頻りひとしきその弾力を楽しむと、次に陰囊をギュツと握った。

「こっちはフワフワしてて芯がコリコリしてて、ずっと触っていたくなっちゃう」

陰囊を揉みしだきながら、未だ鋼のように強張った陰茎を扱しどき始めるキャロン。

「あん、こっちはカチカチ。固かったり柔らかかったり、男の人のココって不思議……ねえラ、モトさま、ここ触られて気持ち良い？」

「ふむ、解っておったのか？」

「あはっ、この臭いと味で……」

キャロンは悪戯っぽく笑うと、ペニスの香りを楽しむように鼻の下に擦りつけ、亀頭に舌を這わした。

荒々しいセックスで乱れた後れ毛を指で整えてやるマリオ……否、それはマリオの姿をしたラモー・ルーであった。マリオに寄生させていたラモー細胞を介して彼の遺伝子を取り込んだラモー・ルーはマリオに擬態できるようになっていたのだ。

「どうだった、人間の牡おとことのセックスは？ フフフ」

「うーん……」

キャロンは顎に手を当て真剣に考えた後……

「よく分かんない……だからあ」

ひらりとマリオに馬乗りになると、自ら秘裂を広げ胎内へとペニスを導き入れた。

「あはあん……だから、もつとあたしのココを突いて分かせてラ、モーさま！」

ニヤリと口角を上げるマリオ・ラモー・ルー。

「フフフ、おまえにも契ちぎりの儀式を行う刻ときがやってきたようだ」

そう言うのと腹の上のキャロンの子宮を突き上げるマリオ・ラモー・ルー……。

襖 みそぎ

ラモー・ルー城の狭い通路を黒いローブを着た二人が並んで進んでいく。その後白いローブを着た者。通路に灯りはなく、黒いローブが手にしたカンテラが行き先を照らしていた。

暫くすると一行は重厚な扉に突き当たった。黒いローブの一人が掛けられた錠前をガチャリと外す。

ギギギイイイ……

重苦しい音が通路に木霊し、まるで魔物が口を開けるように扉が開くと、黒いローブ達が恭うやうやしく白いローブを扉の奥の部屋へと案内した。

「ここでローブをお脱ぎください」

黒いローブに促され、白き者は頷うなずく。

すると衣擦きぬずれの音を残しながら白いローブが床にすべり落ちると、そこにキャロンが立っていた。何時ものように素裸である事には変わりは無かったが、普段身に付けている装飾具アクセサリーは全て外し、髪も下ろしており、文字通り一糸纏いつしまとわぬ姿で。

「こちらへ」

「……はら」

二人の黒いローブの後に従いしずしずと続くキャロン。彼女の歩く様子からは何時ものお転婆は想像出来なかった。それもそのはず、重要な儀式に臨むにあたって所作のレッスンを受けていたのだった。

部屋のさらに奥へと続く短い通路を抜けると、そこは何本もの石柱が天井を支え、大きな石造りの浴槽が据えられた大浴場であった。キャロンがラルの城下街で見た事のある公衆浴場に似た造りだったが、大きく違うのは浴槽には湯ではなく、何やらドロツとした白い半透明の液体が溜められ、それが放つ生臭い臭いが浴場を満たしていた。

(ああ、この臭い……私の体を気持ち良くさせてくれる臭い……)

キャロンの顔が見る見るうちに上気してくる。

「お気づきになりましたか？ここを満たしているのはラモー・ルー様の精液を培養した聖水です」

黒いローブが説明をするが、キャロンは半ばなか上の空。

「……はあ……ああ」

浴室に充満する臭い、生ぬるい湿気がねっとり肌張り付いてくる感触にキャロンは

これから始まる儀式への淫らな期待を膨らませていた。

(ラモー様の舌を思い出しちゃう……)

臍へその下あたりに中心に体が徐々に火照ってくるのをキャロンは感じていた。

「契ちぎりの儀式の前に、キャロン様にはここで御身おんみを清めて頂きます」

黒いローブが手を浴槽の方に広げ、キャロンに入浴を促した。

「さあキャロン様、浴場の中央までお進みください」

「……はら」

液体の発する臭いが媚香びせうのように働き、キャロンは引き寄せられるように浴槽に向かい脚を浸ひたける……

「あふ……ん……」

生暖かい白濁液がまるで意志を持つてるかのようにねっとり絡みついてくる感触に、キャロンは小さな吐息を漏らした。

キャロンが静かに浴場の中央に立つと、水面がユラユラと揺らめき始め、いくつもの波紋が描かれた。

「うふっ、おもしろい」

自分の周りに出来る波紋を、あちらに一つ、こちらに一つ、後に一つ……と指差してい

るうちに、何時しかキャロンは幾何学模様とダンスをするようにクルクルと回っていた。そこへ突然、液体の中から無数の触手が現れると、彼女の太ももを這い上がった。

「あはっ……」

キャロンは待つていたかのように微笑むと、触手達に体を預け為すがままにさせた。

触手は浴槽の液体をキャロンの肌に塗り込むようにヌルヌルと這いずり回ると同時に舌で嘗め回すような動作で彼女の敏感な部分を責め立てる。

「あ……あああん……はあ……はあ……」

キャロンの体に淫欲の火が着くにはさほどの時間はかからなかった。薄く開いた唇から甘い吐息が漏れ始める。

「つく、ああああん……だめ……え……」

触手の淫みだらなマッサージに身を任せ、聖水を塗りたくられたキャロンの体は浴場の仄暗ほのぐらい灯りで、ぬらぬらと輝いていた。

不意に獲物を黽こつていた触手がぜんまいが切れるように動きを止めた。

「……ああん……もうお終よみい？」

キャロンの悦よろこびに蕩けていた表情が不満のものへと変わる……が、すぐに触手は大きく波打つように動き始め、キャロンの手首足首を掴むようにきつく絡みつくると彼女の体を

宙に持ち上げる。

「ああんっ！」

大の字にキャロンを磔はりつけ状態にすると触手は再び動きを止めた。

愛撫を中断され、生殺し状態のキャロンは刺激を求めもぞもぞと体を動かす。

「次は……な……に……い……？ ……ああん……」

キャロンの催促するような声に反応するかのように、磔はりつけ台となった触手の根元から枝

分かれするように別の触手が生えてくる。それはペニスの形をしていた。

「……ああああん」

快楽を与えてくれる新たな来訪者を期待の目で見つめるキャロン。

触手ペニスはツンツンとキャロンの体をつつきながら彼女の口元まで這い上がるとゆっくりと唇をこじ開け、口腔を犯し始めた。

「んんっ！ ……あふっ、んんん、っはっんん……」

キャロンはそれに応えるように触手ペニスに舌を絡みつかせ愛撫を始める。それが愛おしい者の一物いちものつであるかのように入念に……。

「……ふぐ……んんっ……んんっ、……ああん……」

恍惚の表情を浮かべ口淫に耽るキャロンは、大きく脚を開かれた彼女の股下から新たな

触手ペニスが生え出してきた事に気付いていなかった。

無防備なキャロンの秘裂に二本目の触手ペニスがその鎌首を擦りつける。

「んんっ……あああああん！」

不意の攻撃にキャロンの嬌声が鈴の音のように響く。

二つ目がその亀頭でキャロンの秘裂をクチュクチュと嫌らしい音を立てながら何度か撫で上げると、精液で濡れ、淫靡な輝きを放つ花卉が開き、露わになった膣がヒクつきながら愛液を滴らせていた。

「いやああ、……あああああん……きてえ……ああ……」

キャロンは亀頭を追うように腰を動かすが、触手ペニスは焦らすように逃げ回る。そんな鬼ごっこをしているうちに、ふっとキャロンの視界から触手ペニスが消える。

「えっ？ どこへいつちやったの？」

キョロキョロと視線を彷徨わせるキャロンの死角から忍び寄った触手ペニスが彼女の肉壺を一気に貫くとそのまま子宮口へと突進した。

「ひっ、あっ！ ……あああああっ！ ああああああん！！」

子宮を貫かんばかりの衝撃にキャロンは悲鳴とも悦びともつかない声をあげる。

少女の膣を占拠した触手ペニスは居心地を確かめるように最初はゆっくりと、そして

徐々に動きを速めていく。

「はああん……あつあつ！ ……ああああん！」

力強いピストン運動でキャロンの体は跳ね上げられ、そして落下してくる所を触手ペニスが再び突き上げる。

「ああっ！ ……あああつああああん！」

手足を縛められ、体の自由を奪われたキャロンはこの魔物の拷問から逃げることは出来ない。

「ああっ……もっ、と……ああっ、くっんん、ああああつ！」

……否、キャロンはこの人外とのセックスを愉しんでいた。より深く貫かれるよう、触手ペニスの動きに合わせて腰をくねらす。子宮口ポルチオをコンコンとノックされる衝撃が子宮を振るわせ、その波動が下腹部から脳天まで貫く蕩けるとろような快楽に陶醉していた。

「あん……うああつ、ああああん！ あああん！ ああああああ！」

子宮に打ち付けられる淫欲の波動に意識が集中してフェラチオが疎おろそかになってるキャロンを戒めるように口を犯していた触手ペニスはキャロンの喉深くをその亀頭で打ち据える。

「っぐ！ ごほっ……ごほっ……むうんんん……んんっ」

触手ペニスへの奉仕を再開するキャロン。

「うん……はあ……ううむう、ふっ、……ああああっ」

激しく往復する触手ペニスに絡みついたキャロンの花卉はなびらからは潤滑油ローションのようにとろとろと愛液が溢れ出し、辺りに牝めすの臭いを漂わせる。その臭いに誘われるように、また1本、また1本と顔を出してくる触手ペニス。それらはキャロンの小振りな乳房に巻き付いたり、乳首を締め上げたり、クリトリスを擦りあげたり、首筋を這いずり回ったり、……ラモー・ルーによって開拓された彼女の性感帯をくまなく蹂躪する。

にちゃり／＼と淫蛇いんじやの群れがキャロンの体にまとわりつき、蠢うごめく音とキャロンの喘ぎ声のシンフォニーにもフィナーレの時が訪れようとしていた。

「もう……ダメっ……ああああん、あああああん！ ああああっイっちゃううう！」
キャロンが絶頂を迎えようとするその時、触手ペニス達もビクッ、ビクッと大きく脈動を始め……、

「んんっ！ あああああああああっ！」
キャロンがイったのと同調シンクロするように一斉に射精を始めた。
ビュッ、ビュルルル、ビュルルルッ！

激流となって喉に流し込まれる白濁液を一滴も漏らさず飲み込もうとするが、ついに耐えきれず息継ぎをするキャロン。

「んんんっ、くっ、ふぐっ……うううう、あああああああっ！」

吐き出された触手ペニスに構わず彼女の顔に精液を放出し続ける。

「はああああああっ……ん……ん……」

キャロンの小さな膣ヴァギナは噴水のような射精を受け止められず、逆流した精液が結合部から溢れ出し、ぱたぱたと雨のように滴り落ち、

「……はあ……ああああ……はあ……ん……ん……」

オルガスムスにぴくんぴくんと痙攣けいれんするキャロンの体に、無数の触手ペニス達がシャワーのように精液を浴びせていた。

「……はあ……はあ……あ……あ……」

受浸したキャロンの体は白い薄衣を纏まとっているように見えた。

浴槽から上がったキャロンの前に黒いローブ達ひざまずが跪ひざまずく。

「キャロン様の御体が聖水で清められました。これより臨まれる契りの儀式にてラモー・ルー様をつつがなく受け入れることが出来る事でしょう」

黒いローブの一人が杯を彼女に捧げる。

「最後にこれを……ラモー・ルー様から賜った精液でございます」

「……」

杯を受け取ったキャロンは、こくこくと喉を鳴らし……ラモー・ルーの種を飲み干す。そして、唇からこぼれ、あごへと滴った精液を指先で拭い、舐め取った。

「……はああ、ん……」

ついさっきイッたばかりだというのに、乳首が再び尖り、子宮の辺りがきゅんきゅんと疼き始め、思わず甘い声を出してしまうキャロンだった。

「これで禊は終了です、キャロン様」

「では魔王の間へと参りましょう、ラモー・ルー様がお待ちかねです」

「……はら」

契りちぎ

王の間——、そこはラモー・ルー城で一番広い空間が与えられた場所。中央には血の色をした絨毯じゅうたんが敷かれ、それは真っ直ぐに奥の玉座へと伸びていた。人の背丈二倍ほどの高さの壇に置かれてゐる玉座はそれに座る者に相応しく禍禍まがまがしい形をしていた。

玉座へと続く絨毯じゅうたんの上を黒いローブ二人に先導され、腰まである白いベールを裸身に纏まとったキャロンが歩いて行く。絨毯じゅうたんの両脇には黒騎兵がずらりと整列し、キャロン達を静かに見守っていた。

玉座の前に到着すると、黒いローブ達は跪ひざまずき、深々と頭こゝろを垂れる。彼等の頭上で岩が動いたかと思わせるほどの、大きな黒い塊が立ち上がった。

「待っておつたぞ、キャロン」

ラモー・ルーが大仰おおげように両手を広げながら壇上から降りてくる。

天窗で調整されているのか、壇の右隣には月光が作り出した淡い光の柱があり、その中に卵を半分に割ったような形をした椅子があった。それはキャロンを生贄いけにえの間に運んでい

た輿こしと同じく、魔力で空中に浮き、その形は淫みだらな体勢で座る事を強こしいる拵しらえになっているの是一目瞭然うなだった。

黒いローブに促うながされ、キャロンがその椅子に座る。

椅子に体をおさめたキャロンはその白い太ももを大きく開き、椅子の両脇に張り出した肘掛け状のフックに脚を掛けた。それを合図とするように背もたれが後ろに倒れ、フックがキャロンの脚を更に大きく開かせた。

これまでの数々の性の手ほどきでキャロンはその体位の意味を自然と理解していた。

(ああ……あたしのココをラモー様に捧げる格好……)

キャロンの胸が高鳴っていく。

「キャロンよ、準備はできておるか？」

ラモー・ルーはキャロンの頬をなで、彼女の体に沿って指を這わしていき、柔らかな乳房を揉む。

「はい……ああっ」

ラモー・ルーはキャロンの尖とがった乳首をつねるように摘まみ、キャロンの反応を楽しむと、キャロンから一歩後うしろに下がる。

ラモー・ルーが見下ろすキャロンの裸体が光の柱の中で淡く白い光を放っていた。

しばしの静寂が訪れ、それをかき消すように黒いローブの言葉が王の間に響く。

「……キャロン様、ラモー・ルー様へ契りの言霊を」

キャロンはこくりと頷くと、

「ラモー様に子宮を……」

キャロンは潤んだ瞳でラモー・ルーをじっと見据え、内股を掌で愛撫するように恥骨へと寄せていき、秘裂へと添える。彼女の指がすでに半開きになっていた大陰唇をゆくりと左右に広げていき、次に小陰唇を開いていく。

「……捧げます」

自ら子宮へと通じる隘口を露わにし、身も心もラモー・ルーへの恭順を示すキャロン。

「良からう、お前に契りの聖液を授けよう……」

ラモー・ルーの体が溶けていくように崩れていき、漆黒の液体が床に広がった。暫くすると、液体はポコポコと泡立ちながら小山のように盛り上がっていき、蜘蛛の足のような物が何本も突き出して来るや否や、次の瞬間には魔獣が姿を現していた。

魔獣はキャロンが座った椅子にのしかかり、キャロンの顔を覗き込んだ。

紅い眼のギラつきが、ラモー・ルーとの出会いをキャロンに思い出させた。

(あの時もこうやって、あたしの初めてを……)

処女を奪われた悔しい記憶……だったはずなのに、今は目眩めくるめく初体験に感じてしまっている自分に気付くキャロン。

(これからあたしの全部をラモー様にあげるんだわ……)

そう思うとキャロンは体がどんどん昂揚していくのを感じていた。

魔獣の腹からゴツゴツとした雁首が何段もあるペニスが蛇の様に這い出してきた。

キャロンは両の掌で愛おしそうにペニスを包むと彼女の膣口はいぐちへと案内し、脚を魔獣の胴に絡ませ、胎内奥深くへと導く。

「んっ、あああん、」

魔獣が椅子をゆさゆさと上下に揺らす。

「あああっん！ ああん！ あああああん！」

宙に浮いた椅子が元の位置に戻ろうとする反動を利用し、手鞠を突く要領でキャロンの膣ヴァキナを深く挟えぐり、子宮を強打する魔獣。

「ああんっ、あああんっ！ はああああん！」

艶つややかな声を唇から漏らしながら、キャロンの視線はペニスの動きに注がれていた。

やがて魔獣の射精が始まり、自分の膣なかにドブドブと精液が注がれていくのをうっとりとして見つめるキャロン。

精を出し終えた魔獣がキャロンから離れると、黒いローブ達が恭うやうやしい所作でキャロンの手足にはめられた枷を椅子に固定する。

黒いローブが作業を終え、横に退くと待ちかねたように魔獣は再びキャロンに覆い被さる。

「ああ、……ラモー様……きてえ……」

キャロンの期待の視線を浴びながら、魔獣のペニスでキャロンの花卉はなびらに頭を埋めると、細かな振動を始める。クリトリスや花卉ラビアが振るわされ、悶もたえるキャロン。

「ひっ……、ああああああああっ！」

ペニスのヴァイブレーションがもたらす快感にやがてキャロンの女陰から潮が吹き出す。それを合図としたかのように虫の羽音のような音を立てながらペニスが膣内なへと侵入していき、最深部へと達するとキャロンの子宮をその振動で震わしはじめる。

「ああっ、いやああああああん！ あああああんっ！」

キャロンは新しい昂揚感こうようかんに打ち震え、縛しましめられた手足は強張りこわばり、痙攣けいれんする体はだらしなく潮を吹いてしまっていた。

キャロンの胎内なかでは激しく振動する亀頭からスルスルと細い精管が生え出すと、子宮口ポルチオをこじ開け子宮へと挿入した。

「ひっ……いやあああっ！」

何か体が奥へ／＼と入り込んでくる気持ち悪さに悲鳴を上げるキャロン。

プツ……ジュルジュルジュル

「はひっ、うっ、あああああああああっ！」

子宮に直接射精される初めての感覚に悲鳴と嬌声の混ざった声が王の間に響く。

「あああ……」

魔獣が椅子から降りると、キャロンから引き抜かれたペニスからは黒い精液が滴^{した}っていた。

「はあ……はあ……はあ……」

荒い息がおさまり、「もう終わったの？」という表情をキャロンが見せた瞬間……、

「ひぐっ、ひっ……あああああああっ！」

子宮を中心に強烈な快感がキャロンに襲いかかる。

「ああっ！ ああああんっ！ ああああっ！」

月明かりで白く輝くキャロンの裸体、その下腹部にはどす黒い紋様が浮かび上がっていた。

短い間隔で何度／＼もオルガスムスを迎えビクビクッと体を反らすキャロン。

「はああああんっ！ ああああああっ！ いやあああああっ！」
 キャロンのクレバスからは間欠泉のように潮がほとほと逆り、ピチャピチャと床を濡らしている。

「あああん！…いやあああああっ！ ああああああっ！」

光の柱の中で絶頂の嬌声を上げ続けるキャロンを黒騎兵達が微動だにせず見つめていた。

「ああああっ！ ……もう……だめ、っ……いやああああっ！ ……あああっん！」

キャロンはいったい何度絶頂を迎えただろうか……いや、それは常時オルガスマスの状態に置かれていたのかも知れない。

「はあ、はあ……はあ……」

津波のように押し寄せるオルガスマスから解放され、ぐったりとするキャロンであったが、新しい快樂の世界を垣間見て多幸福感に包まれていた。

枷かせが外され、キャロンは椅子から降ろされる。強烈な快感に痺れ、足下あしもとが覚束おぼつかない彼女を黒いローブ達を手助けし、ラモー・ルーの前にひざまず跪かせる。

いつの間にか魔獣から人の形へと戻ったラモー・ルーがキャロンのベールを取り、代わりに彼女の頭に漆黒の冠を載せ、続いて漆黒のケープをかける。

「さあ、こちらへ来るのだ」

キャロンの手を取り、玉座の壇に招き上げるラモー・ルー。

壇上にラモー・ルーと並び立ったキャロンは、自分が場違いな所にいる気がしてモジモジとしていた。

「見よ、今ここには我が軍団の全黒騎兵が集^{つど}っておる……」

ラモー・ルーが玉座の前に整列した黒騎兵達を指し示す。

「今日よりこれらは我が妃キャロン……お前の手勢でもある」

黒いローブが声を張り上げ、宣言する。

「皆の者、今宵ここにキャロン王妃が誕生なされた！」

ガシャン！ ガシャン！ ガシャン！

整列した黒騎兵達が剣で盾を銅鑼^{どら}のように打ち鳴らし、その音が塊^{かたまり}となって夜^{シヤドル}の地に轟いていた。

契りの儀式から三日後……、

自室のバルコニーから夜^{シヤドル}の地を眺めるキャロン。

「キャロン様、お部屋にお戻りください。病み上がりの体に外の風はまだ早すぎますぞ」

キャロン付きの従者となった黒いローブが部屋へ戻るよう促す。儀式の激しさからか、キャロンは二日間微熱を出し、寝込んでいたのだ。

「だって、この方が気持ちいいんだもの」

そう言うや否や、キャロンはバルコニーの手すりの上に飛び乗ると両手を広げバランスを取りながら綱渡りよろしく歩きはじめる。従者の前を張りの良い尻がプリプリと揺れていく。

キャロンはバルコニーの角まで来ると立ち止まり、胸を反らして深呼吸。夜の地シヤドルの風が彼女の体を撫でていく。

「……うーん気持ちいい」

「キャロン様！」

従者の語気が強まる。

「分かったわよ……うん？ あれに乗っているのは……女の人……？」
城から飛び立っていくフライングマシンの編隊に目を凝らすキャロン。

「あれはユリア王女を連れていく部隊です」

「ユリア王女様をどうするの？」

キャロンが表情を曇らせる。

「ラモー様の命で、ユリア王女を昼ヒユの地チに帰すのです」

「そう……よかった」

キャロンはほっと胸を撫で下ろすと、軽やかに手すりから飛び降りた。

従者の眼前で彼女の二つの乳房がプルプルと弾んだ。

「ところでキャロン様、ラモー様から頂いた御召物はどうしました？」

儀式の後、キャロンには妃の服が与えられていた……とはいえ、それは体が透けて見えるような薄衣で、裸でいるのと殆ど変わらなかつた。

「ラモー様はこちらの方が好みだと思つて……うふっ」

素裸のキャロンはバルコニーの手すりに色っぽくもたれかかると、指で太ももから乳房へと自分の体のラインをなぞつた。

「そうですか。では早くお部屋にお戻りください」

従者は無機質に答えると再び部屋へと促す。

「……なによ、もう！」

渾身のイケてるポーズを全否定された気がして、ふくれっ面になるキャロンだつた。

ユリア王女の帰還

太陽が昇らない夜の地では最早日数を数える事がライケには出来なくなっていた。

「あれから幾日経ったんだろう……、ユリア王女様は無事なのだろうか……」

ユリア王女救出隊からはぐれたライケは隊への合流は諦め、単独でラモー・ルー城へ向かっていた。

闇雲に隊を探して森の中を彷徨うよりも、隊と自分の目的地は同じ、いずれ合流できるだろうとの判断だったが、血気盛んな若者の考え、たった一人で多くの魔物が彷徨くデイルンの森を踏破するのは自殺行為に等しかった。

しかし、ライケは三つの幸運に恵まれていた。ひとつはリバースの剣を二振り、父親の形見の長剣とルークから託された戦斧を携えていたこと。遭遇する魔物を倒すことには苦勞しなかった。二つ目は森の中で偶然にもフライングマシンを見つけたこと。何故か分からなかったが、フライングマシンは隠すように置かれていた。これによって、広大なデイルンの森と瘴気が沸く毒沼を突破することができた。三つ目はここ数日、何故か黒騎兵に遭遇しなかったこと。今居る荒涼とした岩石砂漠ではフライングマシン共々身を隠す

場所が少なく、魔物と違い練度の高い黒騎兵達相手にいかな伝説の剣を持っていようと、戦いを挑むのは分が悪かった。

そして今、四つ目の幸運がライケに訪れていた。

剣のようにそそり立つ巨石の陰に身を隠し、小休止していた時だった。向こうからフライングマシンの編隊が近づいてきていた。望遠鏡で様子を探ったライケは思わず「あっ！」と声が出てしまった。なんとそのフライングマシンの一騎にユリアが載せられていたのだ。黒騎兵は四騎、一人で向かっていくには死に行くようなものだったが、ライケは千載一遇のチャンスに掛けた。頭上を編隊が通り過ぎた瞬間、ライケはフライングマシンを急上昇させ、彼等の背後に躍り出ると、瞬く間に三騎の黒騎兵を切り伏せ、ユリアを載せた最後の一騎に斬り込む。……がしかし、背後の異変に気付いた先頭の騎士はライケの奇襲を寸前で受け止めた。

ガキーン！ ギギンッ！

二つの刃が何度も切り結ぶ大きな音が夜の空を震わし、二騎のフライングマシンはクルクルと踊るように降下していく。不時着同然に地上に着陸すると、二人の戦士が飛び降り、激突する。

「ユリア王女を返してもらおう！」

「昼の地の者か？ 何故このような場所に……まあよい、切り捨てるだけよ」
黒騎兵に比べ一回り大きい騎士。その体に似合わず冷静で冷たい声に総毛立つライケ。
「トオーッ！」

ライケはその恐怖を振り払うかのように気合いを込めて剣を打ち込む。

二人が何度も何度も撃ち合ううち、体格的に劣勢のライケは大きな岩へと追い込まれ、
岩を背に防戦一方となっていた。

騎士が放った重い一撃が、受け損ねたライケの肩にめり込む。

「ウゲッ！」

「死ね！」

騎士が体勢の崩れたライケに止めを入れようとしたその時、ライケの剣の柄に彫られた
ラル王家の紋章が月の光を反射し、騎士の目を眩ませ剣筋に迷いを生じさせた。

「クッ！……」

ライケはその一瞬の間を見逃さず、腰に下げた戦斧を騎士の脇腹へと叩き込んだ。

「ゲオッ！」

鮮やかな紅い鮮血が吹き上がり、よろける騎士の頭をライケは兜ごと剣で貫く。

「カハッ！……」

それまでの激しい戦いが嘘のようにゆっくりと騎士が倒れていき、……ドウツ、という地響きを残し、騎士の巨軀きよくが大の字に地面に横たわる。

フライングマシン影から二人の戦いを見ていたユリアが近づいてくる。

「私を昼ひるの地ちへ帰かえそうとしていたのに、哀れなドロス。でも、彼と帰る方が誰も怪しまないでしょう……」

小さく呟くユリア。騎士の骸むくろを見下ろす彼女の瞳が紅く輝いていた。

ライケが王女の前に恭うやうやしく跪ひざまずく。

「姫様、お助けに参りました。」

ドロスに向けていた冷淡な顔がすっと消え、安堵の表情を浮かべるユリア。

「ああ、ライケ！ ああ、助けに来てくれたのですね」

ユリア王女が掠さらわれてから三ヶ月以上が経っていた。

送り出した救出隊も音信不通となり、王家唯一の生き残りを失ってしまったという絶望にラルの国は包まれていた。

しかし、ユリア王女の帰還でそれまでの雰囲気は一転、人々は大いに沸き立った。そして、その熱狂は「ラモー・ルー討つべし」という民意へと暴走していった。それに圧おされ

る形で重臣達の会議でも「ラモー・ルー討伐」の決定が成されようとしていた。

「今度の一件で私の為に何人の衛士達を失ったのですか？ 先の戦いでも多くの犠牲を出しました。私はこれ以上、民の命を失いたくはありません」

ユリアのその言葉で冷静さを取り戻した重臣達は無謀な戦いは取りやめとした。さらに王女の提案で国境警備を嚴重にし、ゴモロス神殿を含め、大峡谷から夜の地側^{シヤドル}への立ち入りを禁止する決定がされた。

ユリア王女救出で一躍英雄となり、行方不明となったマリオ隊長の後任として、衛士部隊長に大抜擢されたライケ。彼は今、王女救出の報告と預かった戦斧を返しにキャロンの村を訪れていた。

「この戦斧のおかげで、王女様をお助けして還ってこられました。」

「そうか、役に立ててなによりじゃ。」

王女の帰還に国中が喜びに包まれているというのにルークは悲しそうな顔をしていた。

「そういうえば、キャロンは元気になっていますか？」

「……キャロン……キャロン……おとお、」

嗚咽^{おえつ}が込み上げ、涙を流しはじめるルーク。

「彼女がどうかしたんですか？」

ルークの話によれば、キャロンは日課の山菜採りに行ったきり帰って来ない。ずっと探してはいるが、手掛かりすら見つからず、もう二ヶ月になろうとしているという。

「……そうですか、キャロンが。しかし、諦めるのは早いです。まだどこかで」

「山菜は国境の向こうで採っておったんじゃ！ ……国境は封鎖されてしまった。これからどうやって探せばいいんじゃ！」

弱々しくライケに掴みかかるルーク。

「それに帰ってきたキャロンの翼キークラには刀かたなき疵があつた。黒騎兵に襲われたんじゃ、もう生きてはおるまい、おうおうおうおお、」

感極まり、その場に泣き崩れるルーク。ライケはそっと寄り添い、号泣する老人をなだめる。

「おう、おう……キャロンは……唯一の、唯一の……ううっ、おおおお！」

「？ キャロンは唯一の……なんですか？」

ライケはルークの言いい様がまう気になり、思わず問うてしまっていた。

「……あ、いや……キャロンは、……キャロンはたった一人の孫娘なんじゃ……たっ、た一人の……な」

今までの感情の昂^{たか}ぶりが嘘のように鎮まったルークが涙を拭いながら立ち上がった。

「……ライケよ、その戦斧はお前が持っておけ、その方が持ち^あ主^いも喜ぶ」

肩を落としたルークが家の中に入っていき、パタンと静かに扉が閉められる。

「……ルークさん」

ライケは閉ざされた扉の前で立ち尽くすしかなかった……